

## すらからの速御船

佐藤, 清 / SATO, Kiyoshi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

26

(開始ページ / Start Page)

125

(終了ページ / End Page)

170

(発行年 / Year)

2002-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012559>

# すらかなの速御船

佐藤 清

## 要 旨

『おもろさうし』の105・792番オモロに現れる「すら」という言葉の解釈には、造船所を意味する「すら場(所)」の「すら」の語源説と連動して、梢・修羅・巢処の三説がある。オモロ語の「すら」は、あくまでも船を鳥に見立てた歌謡における比喩表現に用いられたものであるゆえ、日常生活の言葉として用いられたはずの「すら場(所)」と区別して考えるべきものである。その立場からオモロ語の「すら」を解釈すると、梢と考えるべきものである(「すら場(所)」の「すら」は修羅である蓋然性が高い)。この「すら」は\*sora(与路島方言[sora])に遡るものゆえ、オモロ語において未だ起きていないとされているso>suの変化が起きていることを説く。さらに『おもろさうし』における「す」と「せ」の仮名の用法が提起する問題点を考察する。

- I 導入
- II 「すら下し」とチナウルシー・シナウルシー
- III オモロ語「すら」の解釈
- IV すら場(所)と「すら下し」の語源
- V オモロ語におけるソとスの動揺
- VI 『おもろさうし』の「す」と「せ」の仮名の用法

## I 導入

- 一 五くのまころくよ  
うききよらはりやせ
- 又 たらこかいなてころ
- 又 こゑしのはたかへて
- 又 おなりかみたかへて
- 又 ひかたけにのほて
- 又 おほかくちのほて
- 又 よかるけはゑらて

又 きやきやるけはゑらて  
 又 もとつけなつけて  
 又 やまつけななつけて  
 又 すらからのはやおうね  
 又 すゑからのはやおうね  
 又 なはとまりはりやへは  
 又 おやとまりはりやへは  
 又 も、おうねのふなさき  
 又 やそおうなのふなさき

『おもろさうし』巻十三792番（尚家本）

このオモロは安仁屋本系の仲吉本では、「うききよら」に「舟也」、第十一節の「すら」と第十二節の「すゑ」それぞれに「舟作場の事」という言葉聞書が付いている。

『おもろさうし』の最新の注釈書である岩波文庫の外間守善『おもろさうし』（以下、岩波文庫本とする）における仲吉本をテキストとした校訂テキストと語釈は以下のとおり（左段が校訂テキスト、右段が語釈）。

|              |   |
|--------------|---|
| 一 五くの真ころ子よ   | 五くの真ころ子 「五く」は屋号。「真ころ子」は男の美称。  |
| 浮き清ら 走りやせ    | 浮き清ら 船の美称。  |
| 又 太郎子 掻い撫でころ | 太郎子 人名。船頭。「五くの真ころ子」のこと。   |
| 又 こゑしのは 崇べて  | 掻い撫でころ 敬愛する立派な男。  |
| 又 おなり神 崇べて   | こゑしの 神女名。久米島の神女。航海に関係のある神女。   |
| 又 東嶽に 上て     | 東嶽 久米島仲里村島尻の比嘉岳。  |
| 又 おほが口 上て    | おほが口 奥山の入口。久米島島尻の比嘉嶽。   |
| 又 良かる木は 選で   | 本付け縄・山付け縄 山で大木を切ってひいてくる時、木の幹につける大きな縄。                                     |
| 又 きやきやる木は 選で | すら・末 原義は木の末、即ち梢の意から船作場に転用された。船は鳥にたとえられた。鳥が木の梢の巢で孵り、飛び立つ如く、船も造船所から海上に出てゆく。 |
| 又 本付け縄 縄 付けて | 百御船・八十御船 数多くの船。   |
| 又 山付け縄 縄 付けて |   |
| 又 すらからの早御船   |   |
| 又 末からの早御船    |   |
| 又 那覇泊 走り合へば  |   |
| 又 親泊 走り合へば   |   |
| 又 百御船の 船先    |   |
| 又 八十御船の 船先   |   |

同書はこのオモロの「口語訳<sup>(註)</sup>(大意)」を以下のとおり説く。

五くの真ころ子様、敬愛する太郎子様は、浮き清らを巧みに走らせよ。こゑしの神女、おなり神を崇めて、お祈りをして、東嶽、おほが口の上って、船材になる良い木、輝かしい木を選んで、切った大木に大きな縄をつけて運び出し、船作場から早御船になって出て行くよ。那覇泊、親泊を目ざして走り合うと、百御船、八十御船の先頭に立つよ。

このオモロは細部にいろいろと解釈が分れている面があるけれど、特に第十一節の「すら」の解釈にはややこしい問題があり、諸家の見解が錯綜を極めている。そして「すら」は『おもろさうし』の表記と音韻、さらに琉球方言の音韻史の観点からも興味深い問題を提起するので、以下に卑見を示して御批評を仰ぎたいと思う。

なおオモロの歌番号は仲原善忠・外間守善『校本おもろさうし』の通巻番号に従い算用数字で示した。

『混効験集』(評定所本)には「すら 又すゑ 船作場の事なり」(坤・言語)とある。792番オモロを最初に論じた伊波普猷「あまみや考」は、「すら(造船所の義で、『すら場』とも云ふ)・「すゑ(『すら』の同義語)」としている。

その後の諸家の見解のほとんどは「すら」を造船所と解しながらも、その語源について①梢②修羅③巢処の三説に分れている。

まず「梢」説の論を以下に示す。

東恩納寛惇『南島風土記』の「那覇」の項に以下の論がある。

スラ場

【垣の花町一丁目附近の——引用者】中洲の東端は、「君南風お嶽」と唱へ、久米島の祝女の墓所と伝へられ、西端は築港以前沖縄県監獄の地で、即ち今の製氷工場の所在である。明治十四年監獄が置かれる以前は、スラ場(俗にはシラとも云ふ)と云つて造船場で、唐船の建造修補等も此処で行はれたものである。(中略)

「スラ」は本来木の梢の意で、俗に「スーラ」と云はれる。「おもろ」には「スエ」と対仗し、

すら からの はやおうね

すゑ からの はやおうね(伊波本十三ノ四十七)

の用例があり、船の建造を梢に巢立ちして、空高く舞ひ上がる鳥に譬へる。

仲原善忠「おもろ新釈」には以下のとおり見える。

すら——船作場のこと。すらは又梢の意味を持つ。すらの対語がすゑとなっている所を見ると、もともと梢の意味から来た忌言葉か或は美称かも知れない。舟は、鳥にたとえることから、進水を鳥が巢を出て、とび立つことにたとえたかも知れない。

この「おもろ新釈」の論を受けて仲程昌徳「おもろにあらわれた比喩的表現法としての鳥」は以下のとおり論じた。

そこから、「すら」は、木の梢であり、「枝」であり、そして、鳥が「巢」をかける所であり、卵を産む所であり、綾羽にかえる所であることがわかる。

船のことを、おもろでは「ゑそこ」と呼ぶ例のあることはよく知られているが、又、鳥の巢が、船の底と同様に「ゑそこ」であるという類似は、何かを暗示している。

「よい底」「すばらしい底」の格好と条件は、鳥の巢も、船底も絶対に必要とするところのものである。そこにおける関係も、みのがしていけないだろう。

「ゑそこ=いい底」を持つことが、一方では、りっぱなものを生むことができるし、一方では、りっぱな仕事を安心してすることができる。その一致が、おもろ時代の人々には、はっきり解っていたのであろうと思われる。

そこから「すら=木の梢、船作場」という発想の過程は可能なものとなってくる。と同時に、「船は、鳥にたとえる」表現が、ごくあたりまえなものとして理解できるようになるのである。

一方、「すら」を例えば『邦訳日葡辞書』に「Xura. シュラ（修羅） 船を海へ運びおろすのに、下に敷く木。」と見える修羅であると最初に論じたのは、以下に示す鳥越憲三郎『おもろさうし全釈』である。

「すら」は造船場の意とされているが、各地の方言に、浜から海へ船を下ろすときに船の下にしく丸太を「すら」という。山の斜面から木を落とすことを「修羅落し」ということなどと関連のあるものと考えられ、「しゅら」〔修羅〕の字を当てておく。したがって厳密には、造船場の意ではなく、進水式のときの船下ろしの修羅場のことであろう。対語の「すゑ」〔末〕は木の枝の先、こずえ、のことで、船を鳥になぞらえることから、梢の巢からの巢立ちに出るオモロ用語であろう。

この論の「各地の方言」で「船の下にしく丸太を『すら』という」というのは、琉球列島各地ではなく本土各地においてという意味であろう。『日本国語大辞典 第二版』の「しゅら【修羅】」の項の「方言」欄は、「②船を陸へ引き上げたり海へ入れたりするとき、地上に敷く厚い板や木材。」という用法が、大分県北海部郡・宮崎県児湯郡に、「しら」という語形で千葉県夷隅郡・東京都三宅島・大島・静岡県・島根県、「すら」という語形で宮城県亘理郡・東京都大島・徳島県海部郡・長崎県対馬、「しらぎ〔—木〕」が東京都八丈島、「すらぎ」が神奈川県江の島の方言に見えることを示している。琉球列島において舟の下にしく丸太をスラという地域を私は知らない。なお、この欄は「⑨船を造る場所。」として沖縄の方言に「すら・すえ」があるとしている。これは『混効験集』の用例である。

同じく修羅説に立つものに、『沖縄古語大辞典』の以下の記述がある。

しゅら【修羅】<sup>(註2)</sup> 造船場。船作り場。本来、造船用の台座。古代の大型運搬具

の「しゅら」と同語。造船場のことをスラバ（修羅場）という。オモロ原注に「舟作場の事」（一三巻七九二）とあり、『混集』（坤・言語）にも「すら 又すゑ」として「船作場の事」とある。八重山の古文書にも「スラ所」とみえる。

ここで造船所を意味するスラ場（所）の古文書に現れる例を示しておきたい。

まず『琉球国由来記』（1713年）の巻二一に「故ニ竹富ヨリ出タル船形トテ竹富島ニスラ所相拵置ケル処」（京大本）と見える。そして『久米仲里間切公事帳（擁正本）』（1735年）に「印紙を以村、へ申渡取調すら所江寄せ候事」とある。

なお『沖縄古語大辞典』の「しゅら【修羅】」の項の語形欄には「しゅら・すおら・すら・すうら」と見える。このうち「すら」は、この項が用例として示す『混効験集』の「すら 又すゑ」と105番オモロの「すら」そして792番オモロの例を指すとして、他の「しゅら・すおら・すうら」は外間守善・玉城政美『南島歌謡大成Ⅰ 沖縄篇上』のどこにあるのであろうか。修羅の用例を私は見つけられなかった。もしかしたら、これらの語形は、この辞典の「そら<sup>固</sup> 木の梢。首里方言でスーラ。→すゑ」の項の語形欄に含まれるべきものが混入してしまったのではなかろうか。「そら」の項の語形欄には「しゅら・すおら・すら・すうら・そら」と見える。『南島歌謡大成Ⅰ』を訳文をたよりに調べたところ、梢の用例は以下のごとく存在する。

|                  |                           |                        |             |     |        |
|------------------|---------------------------|------------------------|-------------|-----|--------|
| そら               | キューナ25・49・56・57・65・76・94  | ウムイ110・118             |             |     |        |
| すら               | キューナ72・74・114・122・132・136 | ウムイ135・200・201・328・509 |             |     |        |
|                  | オタカベ200                   |                        |             |     |        |
| すーらー             | キューナ134                   | すうら                    | ウムイ92       | しよら | ウムイ108 |
| すおら              | ウムイ109                    | しゅら                    | ウムイ312      |     |        |
| す <sup>ら</sup> 末 | キューナ72                    | 梢 <sup>ら</sup>         | キューナ138・140 |     |        |

「そら」の項の矢印に従って「すゑ」の項を引くと、その項には「③木の梢。『混集』（坤・言語）に『すら又すゑ 船作場の事なり』とある。→そら・しゅら」とある。この「→そら・しゅら」は『混効験集』の「すら」が梢か修羅か決め難いという執筆者の迷いを現しているのであろうか。この辞典の「あとがき——『沖縄古語大辞典』が生まれるまで——」（外間守善執筆）には「第二次原稿の作成のころから、底本としたテキストの索引を機械力を使って作成し、繁雑な表記の整理を果たすことができた。本辞典のデータはすべて入力されているので、今後、この種の作業の土台となり得ることも付記しておく。」と見える。入力データの公表を切望する。

八重山の古文書には「すら」乃至「すら所」として現れる。これら八重山の古文書に現れる例を、沖縄県教育庁文化課「沖縄県文化財調査報告書 第101集 西表島 船浦スラ所跡」の「前近代八重山造船関係編年史料」からいくつか以下に引用する。

美崎すら堀入浮なから揚下仕 (『八重山島年来記』1677年)

すら所堀入浮なから揚下仕候ニ付 (『長栄氏ハンナー家寡譜 七世信明』1677年)  
かきら崎ニ而作事させ候ハバ、挽様之すら木も余多不入

(1699年「参遣状」一〇二枚目)

右作事すら之儀 (中略) 依之四月三日ニすら下シ仕候間

(1701年「参遣状」一一七枚目)

別而上分之すら所にて、(中略) 古見すら下之砌 (1702年「参遣状」一三二枚目)  
其時分地船作事仕廻すら<sup>(註4)</sup>下せ之儀者、諸島百姓男女召寄、すら木切はみから引、(中略) 仲比より堀すら仕卸船仕引出候掟定、揚すら同断仕候ニ付て (『慶来慶田城由来記』1780年代)

造船所を意味するスラ場 (所) のスラの語源は歴史学者の間でも修羅説と梢説とに別れている (もとより東恩納寛惇も仲原善忠も歴史学者であるが)。

牧野清『『すら所』『すら場』考』は大槻文彦『新訂大言海』の「修羅」の項の説明を引いた後、「以上の説明からみて、古く造船所で船の上げおろしに修羅を使ったことは明らかである。『すら所』『すら場』という用語の生れ出たことは、まさにこのことに由来するものであることも推測に難くない。決して『木の梢』ではなかったと筆者は考えるものである。」と述べる。

一方、高良倉吉『アジアのなかの琉球王国』(p144) はスラ所のスラを梢とする説を「鳥の巢説ともいふべき意見」とした上で以下のとおり説く。

鳥の巢説は修羅説に比べると明快さに欠けるが、私は鳥の巢説に強い愛着をもって  
いる。(中略)

船に対する琉球人のイメージを重視するがゆえに、鳥の巢説に魅かれるのである。  
琉球の神歌では、大型船は一貫して鳥、それもハヤブサやワシ、タカなどの猛禽類<sup>もうきんるい</sup>の  
イメージでとらえられている。たとえば、『おもろさうし』巻一三に、

一 しよりおわるてだこが  
はぢやのさいく あとゑて  
はねうちする こはいぶさ すだちへ  
又 ぐすくおわるてだこが

という一首がある。「しよりおわるてだこ」「ぐすくおわるてだこ」は首里城に君臨する王のこと、「はぢやのさいく」は剥ぎの細工、つまり船大工のことである。その船大工を「あとゑて」(集めて)、「はねうちする」(羽をぱたつかせる)「こはいぶさ」(小さなハヤブサ)を「すだちへ」(巢立ち)させる、という意味である。明らかに、船は船大工の手を借りて、スラ所という巢からハヤブサとして巢立ったのである。

さて、「すら」は『おもろさうし』の中で以下に示す巻三105番オモロにも現れる。

- 一 きこゑ大ききみやなて、  
おちやるみやふさとよま  
ちへおるしよわ
- 又 くにもりきやなて、  
又 よなははまよりやけはま  
おるしよわ
- 又 うちすてるかきすてる  
すりより

末尾の「すりより」の「すり」は、仲吉本で「すり」とも「すら」とも読める以外は、安仁屋本系の諸本でも「すり」である。

『おもろさうし全釈』は尚家本の表記を尊重し本文を「すりより」とする。しかしながら、第一節の「みやふさ」を猫聡とし、第三節を「打ち捨てる。掻き捨てる。擦り寄り。」であるとして「うっちゃりなされるのに、猫はすり寄って来て、」などと解釈するのは首肯し難い。

『校本おもろさうし』は、仲吉本をテキストとする校訂テキストを「すりより」とした上で、頭注において『『ら』か『り』か不明。一首の意味からすれば、『すら』（造船の場所）かも知れない。』とした。同じ仲原・外間による『おもろさうし辞典・総索引』の初版では「すりより 未詳語。」となっている。

本文を明確に「すら」と判断し解釈を展開したのは、以下に示す外間守善・西郷信綱『日本思想大系 おもろさうし』が最初のものである（左段は頭注、右段は仲吉本をテキストとする校訂テキスト。）。

撫で、おちやる 撫で育てておいた。  
御隼 船名。隼のように速く走る船の意。  
降るしよわ （神又は聞得大君が此の世に  
隼を）降ろし給え。  
国守り 神女名。ここは聞得大君の異称。  
与那覇浜 鳥尻郡大里村与那原の浜。  
寄り上げ浜 寄り物の上がる浜。  
うち孵でる・かき孵でる 「うち」「かき」  
は接頭語、「孵でる」は卵から孵化すること。  
船を鳥にたとえ、造船の意。  
すらより 「すら」は梢の意が原義で、  
鳥の梢からの巣立ちにたとえて、船作り  
場の意に使われる。「より」は格助  
詞、…からの意。底本「すりより」。

- 一 聞得大君ぎや  
撫で、おちやる御隼  
鳴響まちへ 降るしよわ
- 又 国守ぎや  
撫で、
- 又 与那覇浜 寄り上げ浜 降るしよわ
- 又 うち孵でる かき孵でる すらより

同書の校注者の外間は岩波文庫本において、このオモロの「口語訳（大意）」を以下のとおり示している。

聞得大君、国守り神女が撫で育てておいた御隼を鳴り轟かせて降ろし給え。与那覇浜、寄り上げ浜に降ろし給え。船作り場から孵化させ給え。

岩波文庫本の脚注欄の「すらより」の語釈は『日本思想大系』とほぼ同じである。

尚家本をテキストとする中本正智・比嘉実・クリストレイク「おもしろ鑑賞—琉球古謡の世界・59」は「すり」の「り」を『ら』の誤写」とした上で、中本が担当した【語釈】は「すら」について外間説と異なる見解を以下のとおり展開した。

「すらより」は「巢から」の意であり、巢を出て海上にすべりだすさまを表現している。ところで「すら」はどのような言葉であろうか。梢と訳しているのはスラ（梢）の方言があるものの、疑問だ。「すら」の「す」は巢であり、「ら」は処であり、原義は「巢」とみなければならない。これが転じて造船所の意にもなったのだ。現代方言で造船所をスラとかシラ、これに「所」をつけてスラジュとっているのがこれだ。「すら」の解釈について第三の説「巢<sup>す</sup>処<sup>ら</sup>」が現れたわけである。

比嘉が担当した【現代語訳】は以下のとおり。

聞得大君様、国を守護してくださる神女様が撫で育ててきた御隼号は造船所から、今、与那覇浜の海に進水するのだ。祝福して船を浜に降ろせ。

## Ⅱ 「すら下し」とシナウルシー・チナウルシー

『おもしろさうし』巻廿二1550番オモロの前書に「唐船すらおろし又御茶飯の時」とある。『久米仲里旧記』（1706年頃）のオタカベの前書にも「船之かわら居せすらおろし之時御たかへ言」と見え、『久米仲里間切公事帳（道光本）』（1831年）に「一 作事船すら卸之時構之役」と見える。そして前掲の八重山の1701年の「参遣状（一一七枚目）」に「すら下シ」、1702年の「参遣状（一三二枚目）」に「すら下」、『慶来慶田城由来記』に「すら下せ」とあった。

伊波普猷『校注混効験集』の「すら又すゑ」の項には「今は進水式を意味する『すらおろし』といふ熟語にのみのこる。」という記述が見える。私が調査した範囲内では、現在の首里・那覇方言で「すらおろし」は使われていないようである。『沖縄古語大辞典』の「しゅら—おろし【修羅下ろし】囧」の項は『久米仲里旧記』のオタカベの例を示して、「舟の進水式のこと。船を『しゅら』から海に下ろし浮かべること。この時神歌が謡われたことは、国頭村安田のキューナ〔囧ク八四・クー二〇〕からも知られる。」としている。ただしこの安田のキューナ（二つはほぼ同じキューナ）にあたってみると、それは「修羅下ろし」という言葉の存在を示すものではない。『南島歌謡大成Ⅰ』がキューナ84として

示すものは、琉球大学民俗研究クラブ「国頭村 安田部落 シヌグまつり調査報告」が記録したもので、キューナの前書に「船作○品ウルシクエナ」（「○印は解読不可能文字」とある）と見える。「修羅」ではなく「品」である。キューナ120の方は仲程正吉『国頭村の今昔』（沖縄風土記刊行会1970）が記録したものである。『南島歌謡大成Ⅰ』では、その前書が「船作□クエナ」（「□印は解読不可能文字」とある）となっている。出典である『国頭村の今昔』を残念ながら私は未見なのであるけれど、その仲程正吉による『沖縄風土記全集第一巻 国頭村編』には、そのキューナが載っている。そこでは、前書は「船作○品クエナ」（○印は解読不可能文字とある）となっている。「品クエナ」ではいよいよ意味がわからない。原文に誤脱があったのであろうか、活字化の段階で誤りが生じたのであろうか。

『沖縄古語大辞典』の「しゅらーおろし」の項の語形欄には「すらおろし・<sup>スナオリ</sup>砂下」と見える。「<sup>スナオリ</sup>砂下」は『南島歌謡大成Ⅰ』のウムイ112の前書に「<sup>スナオリ</sup>砂下（舟下シ）ノ時ノオモイ（国頭間切）」とある。出典は『諸間切のろくもいのおもり』（未見）。『南島歌謡大成Ⅰ』の「出典文献解題」によれば、『諸間切のろくもいのおもり』は田島利三郎の編になるもので、成立は「明治二十八（1895）年か。」ということである。この「<sup>スナオリ</sup>砂下」とここで論ずる「すら下し」・チナウルシー・シナウルシーとの関係は不明。振り仮名のスナオリはおそらく共通語であろう。

蛇足気味であるが、上述のとおり1550番オモロの前書に「すらおるし」が現れるのだから、この辞典の「しゅらーおろし」の項は「固」の他に「才」も示すべきであり、語形欄に「すらおるし」を示すべきである。この辞典は、同じ前書に現れる「御茶飯」を用例とする見出し項目を立てているのであるから。

さて、安田のキューナの前書に現れた「品ウルシ」は何であろうか。

『沖縄古語大辞典』の「つなーおろし【網下ろし】「固」」の項には、「新造船を最初に海に浮かべる前の祈願。（中略）用例の『ちなおろし』は、スラウルシ（しゅらおろし）の転訛か。《ちなうるしーの祈願》〔固 オー六一〕語形 ちなうるしー」と見える。この「ちなうるしーの祈願」という言葉は、出典である上原初美「糸満における漁業ニンジュ」にはそのままの形では出てこず、『南島歌謡大成Ⅰ』の編者が付けたものなのであろうけれど、「糸満における漁業ニンジュ」には『南島歌謡大成Ⅰ』が収録したオタカベの前に「チナウルシー」として以下の説明がある。

新造船を最初に海に浮かべる前に行う御願であり、その順序として、まず舟を浜に運び、ヒー（舟の前方）をニーヌファ（北）、トゥム（舟の後方）をウマヌファの方向にむけ、ウシカキ（帆柱をたてる箇所）にハナグミ、マース、サキを供えて祈願するが、その際線香は使用しない。

糸満市史編集委員会『糸満市史 資料篇 民俗資料』の「第2章第2節 漁業」の項

(金城善執筆)を見ると、造船儀礼にはティーンダティ(手斧立て)とシナウルシーの二つあるとし、シナウルシーについて以下のとおり説明する

サバニが完成すると、ティーンダティ同様に日を選んで、シナウルシーという儀礼を行う。前もってイービンメー(威部の前=白銀堂)やヌンルンチなどのムラの拝所、宗家のグワンス(元祖)を拜んで、サバニが完成したことを神や先祖に報告しておく。サバニは船主の所属するジョーグワーのヒラに持っていき、その舳をニーヌワ(子の方=真北)に向けて置き、酒や塩の他に餅などの供物を供え、ミチスに合わせて、舟の落成と海上安全を祈願する。後は盛大に祝宴を開いた。

進水式を意味する言葉にチナウルシーとシナウルシーの二つがあるわけである。

沖縄本島南部にある沖縄最大の漁港である糸満を訪れ、前掲の文章の執筆者である金城善氏(糸満市立中央図書館主管兼奉仕係長)にお話をおうかがいしたところ、シナウルシーは「綱下ろし」であろうとのことであった。氏によれば、1953年生の氏自身の発音では綱は [tʃina] であるけれども、1892年生の氏の祖母君は綱を [ʃina]、地名の糸満(現代方言では [ʔitʃimaN]) を [ʔiʃimaN] のような、tとsの中間の音でtよりもsに近い音で発音していたとのことであった。[tʃi] と表記すべき弱まり破擦音であったか。中本正智『琉球方言音韻の研究』p296は「糸満方言では tʃi, tsu→ʃi, su の現象がみられる。」として「[ʃikasaɴ] (近い) [ʃike:ɴ] (使う) [ʃikuɴ] (突く) [sukuɴ] (作る) [ʃidʒiki:ɴ] (続ける) [ʃidʒiɴ] (鼓) [ʃina] (綱)」等の例を示し、「ただし、[tʃi:] (乳) [tʃa:] (茶) [tʃibu] (壺) などのように ʃi にならない例もある。」とつけ加えている。

糸満の元船大工の上原良助氏(1928年生)は進水式は [tʃinaʔuruʃi:] とお述べになり、ロープを [tʃina] と言い、船を海にロープで下ろすからそう言うのだとお述べになった。元糸満市文化財保護委員長の島袋良徳氏(1924年生)にお会いしたところ、氏は進水式は [ʃinaʔuruʃi:] と述べられた。氏は [ʃinaʔuruʃi:] の [ʃina] を先述の古文書に見えるスラ下シのスラと関係があるとお考えであった。なお氏は綱は [tʃina] であるとお述べになった。

私は糸満の中央市場に行き、そこで商売をしておられる年配の御婦人方に「綱を何と言いますか?」とお尋ねすると、一様に [tʃina] という解答であり、「[ʃina] とは言いませんか?」とお尋ねしても否定されるだけであった。ただし、買い物客であるらしい御婦人が「綱は [ʃuna]。」とお述べになった。その御婦人は恥かしがって名前を教えて下さらなかったが、1939年生れであるとのことであった。そして私が調査する姿を見ておられた上原多恵子氏(1936年生)が綱は [ʃina] よ。」とお述べになった。氏に方言を教えていただいたところ、『琉球方言音韻の研究』が示す tʃi→ʃi の例のほとんどは tʃi で現れたのであるけれども、「近い」は [tʃikasaN] とともに [ʃikasaN] とも言うとのことであった。そして糸満市教育委員会の安田栄一氏の御協力により、宮城ヨシ氏(1917年生)と上原静子氏(1926年生)のお二人に方言を教えていただく機会を持つことができた。お二人によれば進水式

は [finaʔuruʃi:] であり、[fina] の意味はわからないとのことであった。網は [tfina]。ただし、<sup>つづみ</sup> 鼓を宮城氏は [tfidʒiN] と発音なされたのに対し、上原氏は [fidʒiN] と発音なされた。そしてお二人の会話の中に、糸満の言い伝えにある地震のない島というものが出てきて、その地震のない島を宮城氏は [tfo:dʒika]、上原氏は [so:dʒika] と発音なされた。金城善氏にこの地震のない島について電話でお尋ねしたところ、それは「経塚」で石にお経を書いて土に埋めたものであるとのことであった。氏はチョージカと発音なされた。このチョージカについて首里の宮里朝光氏（1924年生）にお伺いすると、地震（[ne:]）が起きると、「ne:。ne:。tfo:dʒika。」と言い、地震よ治まれというような意味で使うとのことであった。この [tfo:dʒika] は今から五百年程前に本土から漂着した日秀上人（現在の金武村に流れ着き、那覇に移った）が浦添に埋めたものであるとのことである。

そして糸満で元船大工の玉城孝氏（1917年生）をお尋ねしたところ、進水式は [finaʔuruʃi:] であるけれども、その [fina] の意味はわからないとのことであった。ただし氏は網は [fina] であるとお述べになった。氏は「近い」を [tfikasaN]、「作る」を [tsukuiN]、頭を [tfiburu] と発音なされたのだが、「いくつ」においては [ʔikufi~ʔikufi] という音の揺れが現れた。そして中本正智『図説琉球語辞典』の「明日」の項は糸満方言を [ʔatʃa:] とするけれども、玉城氏は明日を [ʔasa:] と発音なされた。

[finaʔuruʃi:] は「網下ろし」が語源なのであろうけれど、現代糸満方言の [tfinaʔuruʃi:] は古形を保持するものではなく、他方言から入りこんだものではなからうか。周知の如く漁民の方の言葉は変りやすい。

シナウルシーという言葉について、沖縄本島中部にある与那城村の平安座島の中村栄春『私とふるさと』p245にも以下の記述が見える。

平安座における山原船の全盛時代は大正末期から昭和のはじめ頃で、一〇〇隻近い船が活躍していた。（中略）

これらの船はすべて平安座出身の船大工によって建造され、平安座船として高く評価されていた。進水式の日には村中の大人はもちろん、児童生徒も総出で祝い、新造船が無事に「シナウルシー」すると飴玉がふるまわれた。

平安座島を訪れ、まず平安座船の最後の作り手である越来文治氏（1917年生、現在は対岸の饒辺在住）にお会いすると、進水式は [finaʔuruʃi] で、その [fina] は「船作りの現場」の意であるという。網は [tfina]。そして新里達明氏（1925年生）は進水式は [finaʔuruʃi:] と発音し、その [fina] の意味はわからないとのことであった。なお網は [tfina] であるとのことであった。西村勇氏（1929年生）によれば、進水式は [finaʔuruʃi:] と [finaʔuruʃi] の両方の言い方があり、語源はわからないとのことであった。

糸満の玉城孝氏によれば「シナウルシーは船大工ではなく船主が行う。」ものであるという。船主すなわち糸満の漁民の方は沖縄全域に進出したから、平安座島方言のシナウル

シーは糸満方言を取り入れたものではなかろうか。

そして先述の古文書に「品ウルシ」が現れた沖縄本島北部の国頭村安田を訪れると（話者は神山辰子氏1917年生・古堅昇氏1923年生・宮城定信氏1924年生）、「シナウルシ」という語は確認できず、進水式は [tʃinaʔuruʃi] であった。綱は神山氏と古堅氏は [çina] と発音なさり、宮城氏は [tʃina] とお述べになった。宮城氏の [tʃina]（綱）は、那覇・首里方言を母体として成立した共通沖縄方言をお答えになったものであろう。宮城氏は「[tʃinaʔuruʃi] は沖縄本島全体で使う言葉であり、くり船を綱で引っ張って海に下ろすから [tʃinaʔuruʃi]（綱下ろし）と言う。」とお述べになった。

安田の古文書の「品ウルシ」は、進水式を意味するシナウルシという言葉を知り、かつそのシナの意味がわからなかった表記者が品の字を宛てたものであろう。「船作○品クエナ」という前書のあるクエナは、『沖縄風土記全集第一巻』には、「次にあげるうたは、『安波屋一次男、宮城鍋が前に○○○クサンテ記事ス』とある写しに記されているものである」として挙げられているものの一つである。宮城鉄行『国頭村 安田の歴史とシヌグ祭り』に、「アファヤー（屋号・安波屋）の俗名アンビナーのお爺さん・宮城鍋氏が記録していたものようである。しかし、故宮城高五郎氏作成の安波屋の系譜には、トラブル・メーカーであった宮城鍋氏の氏名の記載はない。このアンビナー爺さんは、知性と個性豊かな人で、文字書きでき、<sup>わらざん</sup>藁算で複雑な数字を難なくこなすことができた。」(p201)と見える。著者の安田出身で現在は那覇に住んでおられる宮城鉄行氏に電話で問い合わせたところ、「宮城鍋は今生きていれば150歳ぐらい」の人であり、1933年生れの氏よりも10歳ぐらい年上の人には記憶している人であるとの御教示をいただいた。なお宮城鍋自筆の原文が今どこにあるかはわからないとのことであった。

「船作○品ウルシクエア」と「船作○品クエナ」とはほぼ同じクエナであるけれど、全く同じと言うわけではない。「船作○品ウルシクエア」の「アハレガナシーチンハーエー ヒヂガ山クマギテ」という一節が「船作○品クエナ」にはない。また「船作○品ウルシクエア」が片仮名漢字まじりの表記であるのに対し、「船作○品クエナ」は平仮名漢字まじりの表記である。漢字の用法は同じであるけれど、四つ仮名そのほか仮名の使い方に若干の相違がある。「船作○品ウルシクエア」も宮城鍋が表記したのであろうか。琉球大学民俗研究クラブが記録した「船作○品ウルシクエア」の原文は今どこにあるのであろうか。あるいは両者の原文は宮城鍋が記録した同じもので、活字化の際の扱いで相違ができてしまったのであろうか。御教示を仰ぎたい

ともあれシナウルシーとチナウルシーは「綱下し」なのであって、「すら下し」とは別語と考えるべきであろう。

### Ⅲ オモロ語「すら」の解釈

諸家の論がオモロ語の「すら」と船作場を表す「すら場(所)」の「すら」とを同じ形態素とみて疑わない中、池宮正治『琉球古辞書 混効験集の研究』の「1025すら 又1026すゑ 船作場の事なり」についての以下の注釈に注目したい。

○すら 木の梢、末端。「おもろさうし」巻十三の四七に「すらからの <sup>はやおうね</sup>早御船」とある。説明語句、船作場のことだとあるが、おもろでは梢を意味している。対語は「すゑ」(末)。田島本注、「船作場」に注して「スラバトモ云フ」とあり、また「文字ニハ今必ズスラトアリ」とある。造船所のことをスラバというが、この「すら」とは別。

池宮正治は「鳥 船」において、792番オモロの「すら」を「梢」と訳し「すゑ」を「末」と訳している。なお田島本『混効験集』の注は正確には「文字ニハ今モ必ズスラトアリ」である。

注目すべきは792番オモロの「すら」は対語が「すゑ」(末)である。このことから解るとおり、オモロ語の「すら」は船を鳥に見立てた歌謡における比喩表現で用いている言葉であるから、この「すら」はあくまでも梢の意味を表していると解すべきである。言葉聞書の「舟作場の事」は、比喩表現であることを理解せずリアリズムで解釈してしまった誤訳と考えるべきである。『混効験集』の「すら 又すゑ 船作場の事なり」も同じあやまちである。言葉聞書を付けた1710年の『おもろさうし』の「書き改め」の担当者と、『混効験集』の編者はほぼ共通。

もっとも「すら場(所)」の「すら」の語源が梢であるならば、「この『すら』とは別」ではなくなる。オモロ語の「すら」とスラ場(所)のスラは別語かも知れないし、また同じ語なのかも知れない。池宮の言は、スラ場(所)のスラの語源が不明である中、比喩表現であるオモロ語の「すら」の解釈に、リアリズムを導入してスラ場(所)と結び付けることを諫めたものと受け止めるべきであろう。

その意味で中本正智の「すら」は梢ではなく巢処であるという説は、スラ所のスラとの関りを度外視すれば、船を鳥に見立てた比喩表現の解釈として成り立つように見える。しかし、105番オモロでは巢処と解釈しても通るけれども、792番オモロにおいて「すゑ」(末)の対語としては巢処よりも梢の方がふさわしい。また二音節語をそれ以上こまかく分けることには慎重でありたいものである。

論述の都合上あとまわしにしたのであるけれども、792番オモロの「すゑ」を末と解釈する点で諸家が一致する中、島村幸一「オモロの表現——〈生産叙事〉の視点から——」が異なる解釈を展開している。「オモロの表現」は「すらからのはやおうね」を「すら(造船場)からの早御船」と訳し、「すゑからのはやおうね」を「巢(造船場)からの早御船」と訳した上で、以下のとおり論じる。

このオモロの表現構造は、はっきりしていよう。前半の〈生産叙事〉が、後半の表現を支えているという構造である。つまりは、「すら」(造船場)から「すゑ」(巢、オモロでは船は鳥に比喻される)から既に「早御船」であると謡われるすばらしい船の根拠は、前半の神話的(理想的)な生産過程によっているということなのである。

しかし、792番のオモロの「すゑ」を巢と解する説は音数律の観点から諾いがたい。例えば現代首里方言で巢は [ji:] で末も [ji:] である。また字音語セイ(精)に由来するであろう精力・エネルギーを意味する [ji:] を『おもろさうし』では「せい」(巻四180)・「せへ」(巻十四1030)・「せ」(巻三97)の他に、「すへ」(巻十二742)や「すゑ」(巻七369)と表記した例があるから、792番オモロの「すゑ」を巢と見るのは可能と思うかも知れない。しかしながら、例えば渡を「とう」と「と」で表記した「又 このとうまうわしの(この渡舞う鷺の) / 又 大とまうかくの(大渡舞う鷺の)」(巻廿一1445)などの例から本土一音節語の対応音は音声上は長音であってもオモロという歌謡における音数律では一単位であったことが解る。

792番オモロの対句部は、第一節と第二節の音数律が一致しない。第一節の「五く」を『おもろ新釈』は「屋号、久米島仲里村、字江城に今も、グークと屋号をもつ家がある。これだろうという。」と説く。同書は「五く」を「ごく」と読んでいる。私はかつて久米島で方言調査をしたことがあり、仲里村比嘉の神谷嘉衍氏(1915年生)を話者にした調査記録に、例えば太陽が [ti:ra] とある。『おもろさうし』で太陽は「てた」(巻一2他)と二字の仮名で表記してあるから、「五く」は現代久米島方言でグークであっても、オモロの音数律では二単位と考えるべきなのであろう。従って、第一節の「五くのまころくよ」と第二節の「たらこかいなてころ」こそ対句の音の数が等しくないわけであるけれど、第三節以下は対句の音の数が等しい構造となっている。第八節の「きやきやるけはゑらて」は「きや・きや・る・け・は・ゑ・ら・て」と分析すべきもので、第七節の「よかるけはゑらて」と同じ八単位からなり立っている。第九節の「もとつけなつけて」と第十節「やまつけなつけて」は、このままでは音数律が異なるけれども、仲吉本では「もと、つけな、なつけて」とあり、尚家本の第九節は「な(縄)」の字が脱落とする見方が通常である。尚家本をテキストとする「鳥 船」は第十節の本文を「やまつけなつけて」としている。これは第十節の連続する「な(縄)」の片方を衍字と考えているのであろう。尚家本の第九節が「な」の脱字と考えるにせよ、第十節が「な」の衍字と考えるにせよ、第九節と第十節の音数律は本来同じであったと考えるべきであろう。「オモロの表現」(テキストは尚家本)も第九節の本文を「もとつけな(な)つけて」として第十節と同じ音数律にしている。したがって「すら」が音数律上二単位なのであるから、対語の「すゑ」も一単位ではなく二単位と考えなくてはならず、一単位であるはずの巢と解釈するのは不可なのである。

「すら」の語源に「オモロの表現」は触れていない。「すら」が語源意識を捨象した造

船場の意味である可能性は考慮すべきであるけれど、「すら」を造船場と解釈した上で、「すゑ」を巢と解釈するのは、リアリズムと比喩表現を混在させたあやまちである。

また、「オモロの表現」は105番オモロの「すらより」が尚家本は「すりより」であることから可能性の問題として、『より』を居りとし、『すり』を動詞（例えば、『スリン』元気づく、生气付く＝『八重山語彙』）として考えることができる」とするけれど、それは考えにくいことである。

宮良當壯『八重山語彙』の「スリン [sur'iq] [自動] ①そる（反）、真直に伸ぶ、②元気づく、生气付く、おやく、」を石垣島新川出身の方言研究者である宮城信勇氏（1920年生、那覇市在住）で確認したところ、[suriN] は「真っ直ぐにピンとする」の意であり、「me:da pa:ja surunu。」（まだ 葉は 直立しない）のように使うという。同方言では、[su] はソに対応（袖 sudi 側 suba）し、スには<sup>(注5)</sup> [si] が対応（巢 si: 脛 sini）するのであるけれど、「摺る」<sup>(1)</sup>（終止形 [s̥s̥suN] ・否定形 [s̥s̥sanu]）の例から見て、\*sur>\*s̥ir->s̥is- という変化が起きたとおぼしい。この変化に関連して、かりまたしげひさ「石垣方言の位置づけ」に、<sup>(注6)</sup> /i/ が「/k̥isuN/（切る）、/s̥isaN/（しらみ）、/s̥isu/（白）のように後続する流音/r/を摩擦音/s/に変化させている語例もみられる。」とある。

本土古語のラ行四段動詞の石垣方言の対応形は概略、終止形は [s̥s̥suN]（擦る）の如く活用語尾が [-uN] で、否定形は [s̥s̥sanu] の如く活用語尾が [-anu] である。一方、ラ行の二段動詞の対応形の場合は、「枯る」の対応形の終止形を [kariN] というが如く活用語尾は [-iN] で、その否定形は [karunu] すなわち活用語尾が [-unu] である。従って終止形が [suriN] で否定形が [surunu] であるこの動詞は、二段活用に対応し/\*sore+womu（居）/に遡る語形であって/\*suri-/に遡るのではない。『おもろさうし』にその連用形が現れるならば「\*それ」で現れるはずである。また「すりより」の「すり」に、この [suriN] 以外の動詞を想定するとして、一体いかなる動詞を想定するのであろう。私には見当がつかない。

ここまでの考察でオモロ語の「すら」が梢であることを確認した。

以下に792番オモロと105番オモロの解釈を行っておきたい。その際説明しておくべきことがある。『おもろさうし』は同じ歌詞の記載を省略する傾向があるので、オモロを正確に理解するためには、記載が省略された部分を復元する必要がある。そしてさらに歌形論上の対句部と反復句（refrain）を判別する必要がある。この問題は波照間永吉「『おもろさうし』の記載法 ——記載の省略とオモロの復元をめぐる——」が明快である。

792番オモロでは第二節以下で記載が省略されたのが「うききよらはりやせ」であること明かである。そして「うききよらはりやせ」が歌形論上の反復句であることも明かである。つまり、このオモロでは記載が省略されたのは歌形論上の反復句だけということである。歌形論上の対句部と反復句とを分けた形でこのオモロの復元オモロを以下に示そう。

なおテキストとした尚家本を二箇所にわたって改めた。尚家本の第九節「もとつけなつけて」と第十節「やまつけななつけて」は、「な」(縄)が、第九節で脱字と見るか、第十節で衍字と見るか、判断に苦しむところである。さしあたり安仁屋本系の諸本で「もとつけななつけて」となっているのを尊重し、第九節に「な」を補った。そして最終節の「やそおうな」は諸本異同ないけれど、「な」は「ね」の誤りと判断した。嘉手刈千鶴子『『おもしろさうし』書き改めと『混効験集』編纂について』は、『混効験集』の編者が坤巻でオモロ語を採録した『おもしろさうし』は、1709年の首里城の火災による1710年の「書き改め」(再編集)以前の『おもしろさうし』であることを明かにした。嘉手刈論文によれば『混効験集』の「すら 又すゑ」は、再編『おもしろさうし』巻十三の原資料の一つである「嘉靖三十二年やらさもりまうはらいの時きみま物のみ御前みせゝる御双紙」からの引用である。「やそおうな」の「な」は「嘉靖三十二年やらさもりまうはらいの時きみま物のみ御前みせゝる御双紙」の段階から「な」であったのであろうか「書き改め」の際の誤写によって「な」となったのであろうか。

## 復元オモロ

| 対句部          | 反復句       |
|--------------|-----------|
| 一 五くのまころくよ   | うききよらはりやせ |
| 又 たらこかいなてころ  | うききよらはりやせ |
| 又 こゑしのはたかへて  | うききよらはりやせ |
| 又 おなりかみたかへて  | うききよらはりやせ |
| 又 ひかたけにのほて   | うききよらはりやせ |
| 又 おほかくちのほて   | うききよらはりやせ |
| 又 よかるけはゑらて   | うききよらはりやせ |
| 又 きやきやるけはゑらて | うききよらはりやせ |
| 又 もとつけななつけて  | うききよらはりやせ |
| 又 やまつけななつけて  | うききよらはりやせ |

又 すらからのはやおうね

又 すゑからのはやおうね

又 なはとまりはりやへは

又 おやとまりはりやへは

又 も、おうねのふなさき

又 やそおうねのふなさき

うききよらはりやせ

うききよらはりやせ

うききよらはりやせ

うききよらはりやせ

うききよらはりやせ

うききよらはりやせ

うききよらはりやせ

このオモロを解釈する上で、「すら」以外に特に問題となるのは、「五くのまころく」＝「たらこかいなてころ」は船頭なのか、船大工なのかということである。「あまみや考」・『おもしろ新釈』・岩波文庫本は船頭とする。一方、「鳥 船」と「オモロの表現」は船大工としている。どちらが妥当かということは、近時のオモロの歌形の研究から判定できる。『『おもしろさうし』の記載法』の言を援用するならば、「オモロの一首の解釈は、一節内の詞句を対句部と反復部の弁別もなく、上から下へ素朴につなげて意味をたどる方法を退け」るべきものであり、「叙事（事柄）の展開は『一』『又』にみちびかれる対句部の詞句にあらわれるのであり、反復部の詞句は各節でくりかえし歌唱される囃子的なものと位置づけられている」ということである。すなわち、「五くのまころくよ」の後に「うききよらはりやせ」を上から下へ素朴につなげて解釈すれば、「五くのまころく」＝「たらこかいなてころ」は船頭ということになるけれども、そう解釈してはならないということである。「五くのまころく」＝「たらこかいなてころ」を解釈する際には、対句部の内容のみで解釈すべきものであり、反復句の「うききよらはりやせ」は無視しなくてはならないのである。ゆえに、対句部の内容からして「五くのまころく」＝「たらこかいなてころ」は船大工と見るべきである。なお「もとつけな」と「やまつけな」は木に付ける縄なのであろうけれど、その縄を何故「もとつけな」・「やまつけな」と言うのか、これまでの研究では分明でないので、「もと付け縄」・「やまつけ縄」とした上で、以下このオモロの訳を示す。



次に105番オモロの解釈を行う。その際重要なことは、先に示した原文において、第二節の「くにもりきやなて、」は、対をなす第一節からして、「おちやるみやふさとよまちへおるしよわ」の記載が省略されているということである。そして記載が省略された部分のうち、「おちやるみやふさ」は歌形論上の対句部に属し、「とよまちへおるしよわ」は歌形論上の反復句と見るべきである。この歌形論上の反復句は第三節・第四節でも記載が省略されているわけである。第四節の「すり」の「り」を「ら」に改めること言うまでもない。従ってこのオモロの復元本文を以下のとおりとする。

#### 復元オモロ

| 対句部                   | 反復句        |
|-----------------------|------------|
| 一 きこゑ大ききみやなて、おちやるみやふさ | とよまちへおるしよわ |
| 又 くにもりきやなて、おちやるみやふさ   | とよまちへおるしよわ |
| 又 よなははまよりやけはまおるしよわ    | とよまちへおるしよわ |
| 又 うちすてるかきすてるすらより      | とよまちへおるしよわ |

このオモロの訳は以下のとおり。

| 対句部  | 反復句            |
|--|----------------|
| 一 聞得大君が撫でて育てていた御隼 <small>みゆみさ</small> （船名） | 鳴り響かせて海に降ろしなされ |
| ↓  |                |
| 又 国守り神女が撫でて育てていた御隼（船名）                     | 鳴り響かせて海に降ろしなされ |
| ↓  |                |
| 又 与那覇浜 魚の群れの挙がる浜に 降ろしなされ                   | 鳴り響かせて海に降ろしなされ |
| ↓  |                |
| 又 孵化する 孵化する 梢より                            | 鳴り響かせて海に降ろしなされ |

#### IV スラ場（所）の語源

本論にとって必要なのは、あくまでもオモロ語スラの解釈を明かにすることである。それゆえ、議論の混線を避けるために、ここまでスラ場（所）の語源についての私の考えは述べてこなかった。ここでスラ場（所）の語源についての私の考えを述べておきたい。

那覇方言を記録した外間美奈子・山田尚子「那覇民俗語彙」に「スラバ トsuraba（名）

唐船を造船、修理する場所。垣花のチンペーモーにあった。」とある。このこと「那覇民俗語彙」の informant である崎間麗進氏（1921年生）で私は確認した（以下、本論における那覇方言の話者は崎間氏である）。

首里の宮里朝光氏と久手堅憲夫（1933年生）氏にお伺いしたところ、お二人とも [suraba] /suraba/ と発音なさった。以下、国立国語研究所『沖縄語辞典』が記録した首里方言は首里土族語、宮里朝光・久手堅憲夫両氏から私が聞き取った首里方言は現代首里方言とする。なお『沖縄語辞典』からの引用に際してアクセント表記は省略する。

現代首里・那覇方言では、本土方言のシュには [su] が対応（主 su: 《父》 祝儀 surdʒi 《おいわい》）し、スには [ʃi] が対応する（巢 ʃi: 砂 ʃina）から、スラ場のスラの語源が修羅であるならば、[suraba] の [sura] はスラではなくシュラの音で受け入れたということになる。もしスラで受け入れたなら現代では [\*ʃiraba] のはず。現代では聞くことのできない首里土族語は、現代首里方言にない [ʃu] /ʃu/ と [su] /su/ との音韻上の区別を持っていた。したがって首里土族語では /\*sjuraba/ [\*ʃuraba] を期待するのであるけれども、首里土族語を記録した『沖縄語辞典』にはこの語は載っていない。

スラバのスラの語源が梢ならば、『沖縄語辞典』に「suura (名) こずえ。うら (末)。」とあり（後述するとおりこの語は /\*sora/ に遡る）、首里方言では土族語でも現代の方言でも /\*suuraba/ ないし /\*suraba/ となるはずである。那覇方言でも /\*suuraba/ ないし [\*suraba] となるはずである。スーラ（梢）の複合語が『沖縄語辞典』に「suuranai (名) うらなり。simunai ともいう。niinai (もとなり) の対。」と見える。首里の宮里朝光・久手堅憲夫両氏と那覇の崎間麗進氏はスラ場はスーラ場とは言わないとお述べになったのであるけれど、梢との母音の長短の相違は、スラ場のスラが梢であることを否定する根拠にはなり得ない。単純語では第一音節が長音である二音節名詞は、合成語になった際にその第一音節が長音であるものもあるけれど、長音でないものもある。『沖縄語辞典』からいくつか例を示す。

?uuku 奥。?ukudi 奥の手。秘訣。?uukubaa 奥歯。

naaka 中。nakabi なかぞら。中空。中天。naakaahuukaa 中空。中がから（のもの）。

muuku 婿。muukucoodee 妻同志が姉妹である義兄弟。muku?iri 婿入り式。

また、中本の説くごとくスラ場の語源が巢処であるならば、現代の首里・那覇方言では巢は [su:] ではなく [ʃi:] であるから、[\*ʃiraba] となって [suraba] とは言わないはずである。

ところが那覇の崎間麗進氏は、スラバは生活語彙ではなく昭和12～13年にできた郷土史研究会で知った言葉であるとお述べになった。スラバのあった垣の花出身の宮里清恒氏（1925年生）も [suraba] という言葉は古地図によく出てくるので知っているけれども、垣の花にスラバ跡があったわけではないから、古地図を見る類の知識層でないと知らない言

葉であるとお述べになった。首里の宮里朝光氏に崎間麗進氏のスラバは生活語彙ではなかったという言を紹介し宮里先生の場合も生活語彙ではなかったのではないですかとお尋ねすると、宮里氏は「そりゃそうだ。首里にスラバがあったわけじゃないもん。」とお述べになった。氏にスラバという言葉はどこで知ったのですかとお尋ねすると、氏は「言葉というものは環境の中で覚えるもので…」とのことであり、はっきりしないようであった。宮里氏は郷土史の研究者である。従って崎間氏と宮里氏が [suraba] を耳で聞いて知ったとしても、その [suraba] は reading pronunciation であったかも知れない。ゆえに、その [suraba] という発音から古形を推定することにはあやうさがある。ところが首里の久手堅憲夫氏が、子供の頃、役人であった父上の東京などへの出張の折、那覇港への見送りや出迎えに母上が都合が悪い時に、祖父君に連れられて行った際、「ここにスラバがあった。」と言われた記憶があるとお述べになった。祖父君の生年は書類が不鮮明であるため明確ではないのであるけれど、1876年から1879年の間の生まれであるとのことであった。垣の花のスラバが監獄に取って代られたのは1881年であるから、祖父君が物心ついた時にスラバはなくなっていた可能性が高いけれど、祖父君の代までは、スラバに直接接した人々の発音を聞く機会が十分あったであろうから、祖父君の [suraba] という発音は reading pronunciation と考えなくてよいであろう。この [suraba] という語形は梢説にとって全く問題がない。久手堅氏の祖父君は士族であるから [su] と [ju] の音韻上の区別を持っていたであろうゆえ、[juraba] でも [siraba]<sup>(E9)</sup> でもないということは、修羅説には不利なように見える。しかし、スラバは那覇の垣の花にあったのであるから本来那覇方言であるはずであり、首里士族も那覇方言の [suraba] を取り入れて発音したであろう。従って、久手堅氏の祖父君の [suraba] という発音は修羅説を否定することにはなり得ない。ただし巢処説には都合が悪い。巢処が語源ならば、那覇方言で [firaba] となり、それを首里士族が取り入れても [firaba] と発音するはずである。故に久手堅氏の証言からは巢処説は不可となる。

そして、首里・那覇方言と同じく沖縄本島中南部方言圏に属する渡嘉敷島字渡嘉敷出身の北村操氏（1925年生・那覇市在住）が、渡嘉敷島の西北端のリルファという土地で昔は船作り場があったという場所を [suraba] と言っているのを子供のころ聞いた記憶があるとお述べになられた。氏によれば梢や竿の先を [sura] と言ひ、袖は [suri]・側は [suba] で、巢は [ji:]・砂は [fina]。内間直仁・新垣公弥子『沖縄北部・南部方言の記述的研究』（p106）にも渡嘉敷方言では、ソは [su] に、スは [fi] に対応するという旨の記述がある。同書によれば「シャ・シュ・ショが直音化する。」（p108）のであり、その中に「[su:]（父）[suzdʒi]（祝儀。お祝い）」という例を挙げている。このうち [su:]（父）は渡嘉敷方言といえるか疑わしい例である。同書の「第四章 第3節 親族語彙」には、渡嘉敷方言では「『父』は『チャーチャー』または『スー』、（中略）『スー』は『主』に対応する。『チャ

一チャー』が古く『スー』は後に那覇あたりから入ってきたものであろう。』(p318)とある。北村操氏は渡嘉敷方言で父は [tʃa:tʃa:] であって [su:] はめったに使わないとお述べになり、2001年8月に渡嘉敷で調査（話者は稲守信子氏1908年生・北村登美氏1912年生・吉原静子氏1913年生・棚原茂子氏1919年生）したところ、「[su:]（父）は那覇から来た人が使う言葉で、地元の間人は使わない。」とのことであった。とはいえ私の調査でも「おいわいごと」は [su:dʒi]（祝儀）であり、渡嘉敷方言の [suraba] の [sura] から語源が「梢」なのか「修羅」なのかは決めがたい（私の渡嘉敷での調査では [suraba] という言葉はどなたも御存じなかった）。北村操氏が [suraba] があつたとお述べになったリルファは、そこに行く道が現在ほけもの道となっており、夏はハブも出るので行かない方がよいと土地の方々から忠告されたので訪れなかった。現代渡嘉敷方言（正確に言うと北村操氏が聞いた渡嘉敷方言）の [suraba] からは、その [sura] の語源として梢と修羅は認め得ることになる。仮に語源が修羅である場合、シュラの語形が渡嘉敷方言に入った蓋然性が高いということになる。もしスラの語形が入ったのならば [ʃiraba] となっているはず。ただし、渡嘉敷方言の [suraba] は那覇方言から取り入れたものである可能性が高く、那覇方言で \*so>su・\*su>ʃi の変化が起きる前に、渡嘉敷方言で \*so>su・\*su>ʃi の変化が起きていたならば、那覇方言の [\*sura]（修羅）の [\*su] を渡嘉敷方言では \*so>su の変化を経た [su] で受け入れることになるから、渡嘉敷方言の [suraba] となるはずである。

そして巢処が語源であるならば、現代渡嘉敷方言で [\*ʃiraba] のはずであるから、巢処説は蓋然性が低い。もっとも、那覇方言で \*su>ʃi の変化が起きる前に、渡嘉敷方言で \*so>su の変化が起きていたならば、那覇方言の [\*sura]（巢処）の [\*su] を渡嘉敷方言では \*so>su の変化を経た [su] で受け入れることになるから現代渡嘉敷方言の [suraba] になるはずであり、巢処説は可能性がゼロではないということになるのであるけれども。

問題は『南島風土記』に「俗にはシラとも云ふ」とあり、中本正智も「現代方言で、造船所をスラとかシラ」というと述べていることである。中本の出身地である沖縄本島玉城村奥武で調査（話者は中本ナヘ氏1907年生、中村徳正氏1915年生、津波古六郎氏1922年生、知念清輝氏1925年生、知念正一氏1927年生）したところ、造船所は [ʃunaja:] であり、造船所を表すスラとかシラとかいう言い方は知らないとのことであつた。なお奥武方言で梢は [sura~ʃura] /sura/。首里・那覇でシラ場（所）というなら、そのシラの古形はスラであつてシュラヤソラではないということになり、少なくとも梢説は不可ということになるのである。

ここで、『南島風土記』の「『スラ』は本来木の梢の意で、俗に『スーラ』と云はれる。」という言葉の「俗に」という表現に注目したい。首里土族語を記録した『沖縄語辞典』に suura と見えることからわかるとおり、梢をスーラと言うのは卑俗な言い方ではない。『南島風土記』の「俗に」は「口語では」と解すべきものである。従って「スラ場（俗に

はシラとも云ふ)は、「古文書にはスラ場と書いてあるけれども、現在の口語ではシラ場とも言う。」という意味に解すべきなのであろう。しかしながら、現代の首里・那覇方言でシラ場という言い方は確認できない。『南島風土記』も「おもろ鑑賞」も著者が東京在住時に執筆したことでもあるゆえ、ス>シの音韻変化の法則から類推してシラという語形を頭の中で作り上げてしまったのであろうと私は見ている。那覇出身の東恩納の場合、那覇方言でダ行音のラ行音化により「巢出す」に由来する「孵化させる」(現代首里方言 [jidasuN]) を [jirasuN] と言うことがその思考に影響した面があるかもしれない。

なお先述の如く『久米仲里間切公事帳 (擁正本)』に「すら所」とあり、中本は「スラジュといっている」とのべるけれど、崎間麗進・宮里朝光・久手堅憲夫の三氏ともにスラバであってスラジュとは言わないとお述べになった。

そして現代石垣方言の発音はどのようなのであろうと、宮城信勇氏にお尋ねすると、氏は船作り場は [suradzu] であるとお述べになった。

この方言で梢は [sura]。ゆえに [suradzu] という語形は梢説にとって全く問題のない語形である。

一方、[suradzu] という発音は修羅説には不利である。なぜなら、この方言では [su] と [ju] が音韻的に対立するようであり、[su] は先述のとおりソに対応し、[ju] はショの他にシュに対応(朱 ju: 主 ju: 棕櫚 ju:ru)する傾向があるからである。修羅が [\*jura] でこの方言に入ったならば、スラ所のスラは現代でも [jura] であろう。そして、先述のとおりこの方言では \*sur->\*s̄ir->s̄is- という変化が起きたから、修羅が [\*sura] でこの方言に入ったとすれば、現代方言で [\*s̄isa] であるはずである。ただし、石垣方言で \*so>su・\*su>si の変化が起きた後に、修羅が [\*sura] の形で入ったならば、現代石垣方言でも [sura] となるであろう。

さらに巢処が語源であるならば、やはり \*sur->\*s̄ir->s̄is- の変化により [\*s̄isa] であるはずである。従ってこの説も不利となる。ただし、この語が那覇方言から入ったと仮定して、那覇方言で巢処が [\*sura] の時期に、石垣方言で \*so>su の変化が起きていたならば、現代石垣方言でも [sura] となるであろう。

故に [suradzu] という語形からは、[sura] の語源として修羅と巢処の可能性は否定はできないとしても、梢である蓋然性が高いということになりそうに思えた。

ところが、宮城氏にお会いした後、石垣島で調査すると、元船大工の方を含めて、「スラ所<sup>ジュ</sup>という言葉は古文書で見て知っているけれども、日常の話し言葉で聞いたことはない。」との答ばかりであった。そこで石垣島から宮城氏に電話を入れて確認すると、宮城氏自身も [suradzu] という言葉を耳で聞いたことはなく、その発音は石垣方言の音韻体系から推定したものなのであるけれど、歴史学者の牧野清先生もそう発音しておられたので、牧野先生にお会いしてみるとよい、という旨のアドバイスをいただいた。そこで牧野清氏

(1910年生)をお訪ねしたところ、牧野氏も[suradzu]という言葉を目で聞いたことはなく、古文書で見て知ったとお述べになった。そして氏は『混効験集』を収録した伊波普猷の『古琉球』を手に取られて「これで知った。」とお述べになった。

牧野氏の「『すら所』『すら場』考」にも、「石垣市字登野城の宮良当勉翁(九十歳)は、大要次のように伝えている。『すらということば知らないが、(後略)』とある。現代の石垣島の方言では、スラ所という言葉は、古文書で見る言葉であって、日常生活で耳にする言葉ではないようである。宮城氏と牧野氏の[suradzu]の発音は reading pronunciation なのであるから、その発音から、語源を推定することはできない。

首里の久手堅憲夫氏と渡嘉敷出身の北村操氏の証言から、スラ場のスラの語源説の中で、巢処説は蓋然性が低いと言えそうであるけれど、稍か修羅かは決め難い。そこで、前掲の八重山の古文書の用例を虚心に見れば、「すら木」(1699年の「参遣状」一〇二枚目・『慶来慶田城由来記』)は、先述の『日本国語大辞典 第二版』の「しゅら【修羅】」の項の「方言」欄が示す東京都八丈島方言の「しらぎ」や神奈川県江ノ島方言の「すらぎ」と同じ言葉と考えるのが素直というものであろう。スラ場(所)のスラは修羅が語源である蓋然性が高いとすべきであろう。

そして「すら下し」も、1701年の「参遣状(一一七枚目)」や1702年の「参遣状(一三二枚目)」・『慶来慶田城由来記』に「すら所」や「すら」とともに現れることから修羅と見るべきであろう。私は先に『おもろさうし』の「すら」(巻三105・巻十三792)が梢であることを説いた。ならば、『おもろさうし』巻廿二1550番オモロの前書に「すらおるし」が現れるわけであるから、「すらおるし」の「すら」は梢と考えるべきであるという反論がでてくるかもしれない。しかしながら、この「すらおるし」はあくまでも前書に現れた言葉であり、オモロという歌謡に現れた言葉ではない。言いかえれば、「すらおるし」は韻文ではなく散文に現れている言葉なのである。前述の八重山の「参遣状」や『久米仲里旧記』のオタカベの前書、『久米仲里間切公事帳(道光本)』の「すら下し」も散文に現れている。スラ場(所)も散文に現れるという点で共通している。「すら下し」のスラも修羅であろう。

## V オモロ語におけるソとスの音の動揺

オモロ語の「すら」が梢であるということは、沖縄方言の音韻史の研究に修正を促すものである。

夙く平凡社の『大辞典』に「スーラ 琉球方言。〔<sup>そら</sup>末〕草木などの末。本或は根に対する語。」と見えるように、『おもろさうし』に「すら」で現れる梢は、以下に示すとおり/\*sura/ではなく/\*sora/に遡る語形である。上代語ソ<sub>甲</sub>ラ(「蘇良は行かず」『古事記』歌

謡35)の対応形であろう。

現代首里方言で梢は／suura／ [su:ra]。この方言でスには [ʃi] が対応し (先述)、ソに [su] が対応 (袖 sudi 側 suba) する。

沖縄本島北部方言圏に属する伊江島方言 (話者は山城文男氏1911年生) では、梢は [sura]。同方言ではソに [su] が対応 (袖 sudi 側 suba) し、スには [si] が対応 (巢 si: 砂 sina) する。

徳之島の伊仙町阿三方言 (話者は直谷尚彦氏1927年生・直江淳郎氏1931年生・直江ヤニ子氏1931年生) では、木やサトウキビの先端を [sura] と言う。同方言ではソに [su] が対応 (袖 sudi 側 suba<sup>▼</sup>) し、スに [si] が対応 (巢 si: 砂 sina) する。

奄美大島の笠利町佐仁方言 (話者は宮崎武彦氏1910年生・宮崎ナツ氏1914年生) では、梢は [sura]。同方言ではソに [su] が対応 (袖 sudi 側 suri) し、スに [si] が対応 (巢 si 砂 sina) する。

以上は北琉球方言圏に属する方言である。

南琉球方言圏に目を向けると、多良間島 (話者は、字仲筋の大山春翠氏1917年生、大山美江子氏1917年生、字塩川の渡久山春好氏1921年生・砂川長清氏1922年生・福嶺松生氏1919年生) では、サトウキビや蛸の足の先端を [fura] と言う。多良間方言ではソに [fu] が対応 (袖 fudi 側 fuba) し、スには [s] が (巢 si: 捨てる sitil) が対応する。

与那国島の祖納方言 (田頭静江氏1915年生、宮良保全氏1918年生、宮良節氏1921年生・池間苗氏1919年生・崎原初子氏1920年生) では、梢は [sura]。同方言ではソに [su] が対応 (袖 sudi 側 suba) し、スには [ʔʒi] が対応 (巢 ʔʒi 砂 ʔʒina<sup>N</sup>) する。

そして奄美大島の属島である与路島の方言 (話者は喜入初勇氏1915年生・福貞江氏1915年生・屋崎一氏1920年生名瀬市在住・津留智和氏1925年生) では、竹竿の上半分を [sora] と言う。下半分は [ni:] (根)。奄美大島の方言は o を多く保持する点で琉球方言の古層を保持する方言として知られているけれど、その中でも与路島方言は特に多く保持する注目すべき方言である。例えば、臍は [hoso]、踵は [ʔado]、枝は [joda<sup>(iE11)</sup>]、親は [ʔoja]、卵は [k'oga<sup>(iE12)</sup>]、眉は [majo]。もっとも、[o] を多く保持するということはそれだけ共通語に似ているということであるから、その [o] を保持していると見える語形が伝統的な与路島方言なのか、共通語を取り入れたものなのかの判別が難しい面がある。与路島の高年齢層の方々は日頃共通語になじんでおられる。なお、この方言では o を保持するのではなく、u > o の変化を起こしたと見るべきものもある。例えば、布は [nono:]、糠は [nok'a]、床は [jok'a]、莫迦は [mono:] (無能)、歌は [ʔot'a:]。この u > o の変化は奄美大島の他の方言でも起きているようである。

／\*sora／に遡る梢が『おもしろさうし』で「すら」と表記してあることは、オモロ語ではソ > スの変化が起きていないという現在の学界の共通理解 (consensus) が解消すべきもの

であることを示す。

高橋俊三『おもろさうしの国語学的研究』は、『おもろさうし』の言語を「o から u への変化の過渡期とみなしたほうが穏当なように思われる。」(p118)と説く。同書 (p106) はソ>スの変化の有無について以下のとおり考察している。

(四)「そ」と「す」の混在

A 本来「す」が期待されるところに「そ」も書かれている例

ておりあすび等〔一八例〕…よりあそび〔一例〕 (～遊び)

\* 語幹部の「あそ」にのみ注目したばあい、「あす」は他に六九例あるのに、「あそ」の例は他にない。また、現在の琉球方言でもアスに対応している。これらの点からすると、「あそび」は本土の発音なり、表記法なりが混入したものと考えられる。

すでおやくに等〔一例〕…みそでがなし等〔七例〕 (瞬で～)

\* 「みそでがなし」は、従来「み瞬で加那志」と解釈されてきたし、中本正智氏もそう解釈して、「当時、すでに so→su 変化があったことが知られる」と述べておられる。「御袖加那志」と解釈することも可能で、今後の検討を要することである。

B 本来「そ」が期待されるところに「す」も書かれている例

例なし。

C 本来の形が不明だが、混在している例

そさん〔二例〕…すさのね〔一例〕 (波～)

\* 「そさん」〈一の三八〉の対句に「あおなみや」が来てい、「すさのね」〈三の九〉の対句部に「かすのね (風の根)」がきている。その点からすると、同じ語を表記しているようである。しかし、「かすのね」の表記、意味ともに特殊であり、疑問が残る。

(五)「ぞ」と「ず」の混在

A、Bとも、例なし。

中本正智「おもろ時代の仮名遣からみた音韻」は「みそてかなし」を「み瞬で加那志」と解釈する立場から、オモロ語において so>su の変化が完了していたと考えたわけであるけれど、この語を『沖縄古語大辞典』・岩波文庫本ともに「御袖加那志」と解釈している。

従ってオモロ語ではソ>スの変化はまだ起きていないということになる。

ところが、梢の琉球方言の祖形が/\*sora/であり、『おもろさうし』で「すら」と表記してあることは、オモロ語においてソ>スの変化が始まっていることを示す。

『おもろさうしの国語学的研究』は、o>u の変化の検討の「方法として、本土の古語に対応する o の母音が、ウ段の仮名で書かれているということをもって、o が u になって

いるとするのは危険であるから、同じ単語をオ段の仮名でもウ段の仮名でも書いている語を取り出し、検討するという方法で行なうことにする。」(p102)と述べる。この方法は正当である。しかしながら、この方法だけでは「すら」(梢)のごとくオ段の仮名とウ段の仮名のどちらかの用例しかない例を漏らしてしまうことになる。

「そさ」(巻一38・巻三95)と「すさ」(巻三96)の関係もソとスの動揺の反映であろう。仲吉本の38番オモロの「そさ」には「波也」、95番オモロの「そさ」には「波の事」という言葉聞書が付いている。『おもろさうし辞典・総索引 第二版』(以下『おもろさうし辞典』とする)には、「そさ(荒) 荒波。波風。原注に『波也』(一-三八)、『波の事』(三-九五)とあるが、『かすのね(風の根)』の対語として『すさのね』を用いているのをみると、荒風の意と考えられる。」・「すさ-の-ね(荒の根) 荒風の吹いてくる源。」と見える。『沖縄古語大辞典』は「そさ<sup>㊦</sup> 荒波。波風。オモロ原注に『波の事』(三巻九五)とあるが、『かすのね』(風の根)の対語として『すさのね』を用いているのをみると、荒風の意と考えられる。」としている。

『おもろさうしの国語学的研究』(p106)は、96番オモロの「すさのね」の対語が「かすのね」であることから、「『かすのね』の表記、意味ともに特殊であり、疑問が残る。」と述べて、「そさ」と「すさ」を同じ形態素と見ることに懐疑を示した。しかしながら、同書p46ではズとゼの音が合流した例として「か<sup>ず</sup>く二一の一一」…か<sup>ぜ</sup>く二一の四八」(風。二つのオモロは重複関係にある)を示していることからわかるとおり、「かすのね」を「風の根」と見ることに問題はないはずである。故に「すさのね」を「風の根」と解することにも問題はない。「風の根」と言う表現は『おもろさうし』中に他の例がないけれども、組踊に「風の根も絶えらぬ、雨の根もたえらぬ、」(伊波普猷『校注琉球戯曲集』孝行之巻)とあるから、「風の根」という表現を不自然とは言えまい。

『おもろさうしの国語学的研究』は「そさ」・「すさ」を「本来の形は不明」とする。この語は上代語スサ(「咲き酢左乾たる」『万葉集』巻十2281・「健速須左之男命」『古事記』上巻)の対応形であろう。この語は現代琉球方言で存在を確認できず(正確に言うと私は知らない)、古形が\*ソサなのか\*スサなのか決めがたい。「すさ」が表音的な語形で、「そさ」は、「おもろ表記」と言われる「国語的仮名遣いと表音的仮名遣いの摩擦の中で、国語的仮名遣いを表記法の規範にしようとする規範意識が強く働いて、婿を『もこ』、国を『こに』と書くようないき過ぎた類推表記で、『規範意識による類推仮名遣い』ともいべきもの」(『おもろさうし辞典』凡例)という考え方が出てくるかもしれない。しかしながら、今日の研究では『おもろさうし』の表記は平仮名を一種の音声記号として用いた表音的な表記であることが明かとなっている。ちなみに「もこ」(巻十二729二例)は表音的な正確な表記であろう。かりまたしげひさ「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム(上)」は、「諸鈍方言では\*kが広母音\*aと半広母音\*oにはさまれると、/h/に変

化するのであるが、そのとき、/h/の両側の母音が同化して二重母音の融合現象に似た音韻変化をおこす。このとき○● (iambic) のような、弱強のリズム構造をもった単語において、最初のみじかくて弱の音節にはせま母音の/u/、あるいはすこしせばめの/o/があらわれ、二番目のながくて強の音節には半広母音の/o/があらわれる傾向がみられる」例の中に「[mu/ho:] 婿」を示し、注で「『婿』に対応する [mu/ho:] の第二音節目の \*k が h に変化しているということから、第一音節目の母音も \*o であったことが推測される。因みに『おもろさうし』にも『もこ』と記載されている。」と指摘する。諸鈍方言と同じく奄美大島の南部方言圏に属する与路島方言では婿は [moho]。そして奄美大島の北部方言圏に属する笠利町佐仁方言で婿は [moXo~moho] (宮崎武彦氏は [moXo] と発音し宮崎ナツ氏は [moho] で発音した)。上代語にも婿がモ甲コ甲で現れた例(「我が毛古に来む」『古事記』歌謡50)がある。

国を表す「こに」(巻十四993)は厄介である。服部四郎「琉球方言と本土方言」は沖縄本島今帰仁村与那嶺方言の国を表す [k'uni:] (仲宗根改善『沖縄今帰仁方言辞典』/kunii/)。/k/は有気音で無気音の/k/と対立する。)が、/\*kuni/ではなく/\*koni/に遡る語形であることを説き、国の日本祖語形として/\*koni/を再考し得る可能性があることを指摘した。ただし服部はその後に表した「音韻法則の例外——琉球文化史への一寄与——」では、「こに」を「伝統的な書き方(正書法のようなもの)が大体きまっている中で、誤用がときどき、あるいはちらほら見掛けられるという傾向」の例のひとつとして示している。これは服部が『おもろさうし』の言語は o>u の変化が完了していたと考えたためである。日本祖語はともかく琉球方言の祖形が/\*koni/であるならば、「こに」は琉球方言の国の古形を留めたものということになる。ただし、『おもろさうし』中に「くに」が多数ある中で「こに」は一例であるから、誤記・誤写あるいは表記者の聞き誤りの可能性も想定すべきである。

「そさ」に戻ると、『おもろさうし』で「す」と「そ」の仮名が全体として極めて正確に書き分けられていることから、「おもろ表記」である蓋然性は低い。

後述するとおりオモロ語において、本土方言のsの対応音は前後にuのある場合を除き \*su から si に変化していたから、「すさ」が古形で「そさ」はその変化形とすると、「そさ」は先ず sisa>sosa の変化形と考えるべきことになる。しかしながら、この変化を想定するには、オモロ語に i<o の変化例と見るべきものがない(正確にいうと私は知らない)ことが難点となる。そこで「すさ」が古形であるとすれば、『おもろさうしの国語学的研究』(p118)によると、本土ウ段音に対応する語をオ段の仮名で書いた例は57例ある(その中には「もこ」(婿)・「まよ」(眉)の如くウ段音が古形でない可能性を高橋が考慮している例も含んでいるけれど)から、「そさ」は \*su>si の変化が起きる前の時期に \*susa>sosa の変化を起こしたものと考えられるべきことになろう。

一方、上代語がスサであっても琉球方言の古形がソサであった可能性も留意すべきである。『沖縄古語大辞典』は「そさ」を沖縄祖語形として立てている。また、本土で中世になるとソサノヲ（「素蓋烏尊ソサノヲノミコト」『易林本節用集』）という語が現れる。『角川古語大辞典』の「そさのを【素蓋烏】」の項によれば、『すさのを』に同じ。中世・近世では、この言い方が普通。」であるという。東恩納寛惇「くるまがさ」は巻十四989番オモロの「くるまかさ」を漢語「車蓋」の翻訳語と指摘し、オモロには「知識人による入念の作品もあつたであらう」と説いた。知識人がソサノヲからソサを取り入れてオモロを作ったという可能性もあろう。オモロ語に本土中世語が多いのは事実である。「そさ」が古形であるならば「すさ」もソ>スの変化例となること言うまでもない。

なお『女官御双紙』収録の「罕に早の時雨請の事 伊是名城の川さらい雨請の時みせゝる」に「あわさふむそさのふむ」という表現がある。伊波普猷「あまみや考」は「すさまじくも」と訳し「あわさふも、そさのふむの意味は判然しないが、むは助辞モで、他の所にはにとも出てゐる。かうした場合に用ゐられたいくつかの例から帰納すると、雨や露の盛に降つたり結んだりする形容であるらしい」と述べる。『沖縄古語大辞典』の「そさのふ」の項は「未詳語。荒波の日・時、荒波の立っている状態、の意か。『のふ』は『よぐれ-の-ふ』の『-の-ふ』と同語と思われる。」とする。この「そさのふむ」については後考を待つ。

この他にソ>スの変化例を探すと、「すとくに」（巻八430）の「すと」（外）がある。『おもろさうし辞典』には「すとーくに（外国） 他国。よその村。」と見え、沖縄古語大辞典』は「そとーくに【外国】 外国。他の国、村。」とする。

琉球方言では外の意味では一般にホカの対応形を用いる。『おもろさうし』では巻十四983番オモロに「ほかあたり」（屋敷周辺）とあり、首里土族語で／huka／。『沖縄北部・南部方言の記述的研究』の「第V章語彙比較表」の「465. 外」によれば、奄美大島の湯湾が [sɯtu]、同じく奄美大島の古仁屋が [s̺itu]、沖縄本島北部の喜如嘉が [sɯtu] である以外の21地点はホカの対応形となっている。本土方言においてソトが中世になって成立した語であることから、この「すと」は明かに移入語である。

古仁屋の [s̺itu] は、同表の古仁屋方言で、袖が [sudi]、側が [suba] で、巢が [si:] で、砂が [sina] であるから、[s̺itu] は音韻対応法則からは\*ソトではなく\*ストに遡る語形となる。この [s̺itu] については、古仁屋と同じ奄美大島南部方言に属する諸鈍方言の音韻を論じた「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネム（上）」が有益である。同論文は、諸鈍方言の／i/ [i] が標準語（古代日本語）の／e/とス・ツ・ズ（ヅ）の母音／u/に対応し、／u/ [u] が標準語の／u/と／o/に対応することを論じ、音韻対応法則の例外例となる／i/の例として、「[s̺iˈra:] 砂糖、[s̺iˈru:] 外」を挙げる。そしてその原因を「広母音／a/、および、半広母音／o/が無声化し、その音色が曖昧化した結

果、中舌母音 /i/ に変化したのであろう。」と推定している。古仁屋の [s̥i̯tu] も /o/ が無声化し音色が曖昧化し /i/ に変化したのであろう。

オモロ語の「すと」も諸鈍方言や古仁屋方言と同様に、母音の無声化による \*soto > s̥i̯tu の変化を起こした例である可能性は考慮すべきである。『おもしろさうし』が平仮名と漢字で表記してあることから、その言語の無声化の実態は把握が困難であるけれども、現在までの研究では無声化に起因する音韻変化は指摘されていない。もっとも「すと」が母音の無声化による [s̥i̯to] の表記例であるならば、オモロ語における無声化による音変化という従来指摘されていない問題の突破口となるわけであるけれど。とはいえ、現在の段階では /suto/ [suto] ([u] の無声化は不明) を表記した蓋然性が高いとすべきであろう。この「すと」が本土方言の外をもともとストで取り入れた語形である可能性をゼロとすることはできないけれども、「すと」は\*ソトで受け入れたものが \*soto > sutu の変化を起こした蓋然性が高いとすべきであろう。この「すとくに」は複合語ソトグニの形で本土方言から入ったものではなかろうか。『日本国語大辞典 第二版』の「そとーぐに【外国】」の項には、用例が「女工哀史 (1925) <細井和喜蔵> 一・二「限りない人口の増殖と外ぐにとの交際は必然的に『綿』を要求した」とあるだけなので、この語が本土でいつまで遡れるのかわからないのであるけれども。

以上『おもしろさうし』の言語において、ソとスとの間の変化が起きていることを述べた。

## VI 『おもしろさうし』の「す」と「せ」の仮名の用法

『おもしろさうし』で so > su の変化が起きているということは、さらにまた新たな問題を提起する。

『おもしろさうしの国語学的研究』(p118) は以下のとおり説いている。

「そ」と「す」、「ぞ」と「ず」、「と」と「つ」、「ど」と「づ」の混在例がほとんどないのは、今日の琉球方言の状態からして、ソ・ゾ・ト・ドの母音も u に近付いたけれども、他方ス・ズ・ツ・ヅの母音が i の音に近付いて、両者の音がはっきり区別されたためであると考えられる。

『おもしろさうし』では高橋の説くように、「す」の仮名は [si̯] の音を写しているとしても、それと同時に [su] の音も写していたであろう。だからこそ、[so] から変化した [su] を写したのである。

この問題は生塩睦子「伊江島方言の音韻対応」の以下の論が有益である（便宜上アクセント表記を省略して引用）。

「ス」が音韻環境によってそのまま *ʃu* に対応することも伊江島・首里両方言に認められる。*ʃu* の前あるいは後に u 母音をもつ音節がくるとき、*ʃi* とならず *ʃu* となる

ようであるが、これは首里士族方言に顕著で、伊江島方言ではより多く *ʃi* に変化している。【/ʃu/は [su] ・ /ʃi/は [si] — 引用者】

| 例)   |   | 伊江島方言     |   | 首里士族方言    |
|------|---|-----------|---|-----------|
| 裾    | — | ʃuʃu      | — | ʃuʃu      |
| 吸う   | — | ʃuRjuN    | — | ʃuujuN    |
| 薬    | — | kuʃu'i    | — | kuʃu'i    |
| 掬う   | — | ʃikujuN   | — | ʃukujuN   |
| 結ぶ   | — | muʃidjuN  | — | muʃubuN   |
| 盗む   | — | nuʃinjuN  | — | nuʃunjuN  |
| すぐれる | — | ʃigurijuN | — | ʃugurijuN |

この生塩論文における首里士族方言は『沖縄語辞典』からの引用。同辞典では [su] の音は /su/ で表記してある。ただし首里士族語でも前後に /u/ がある場合に必ずスの対応音が [su] であるわけではない。/?uuʃi/ (臼)、/'juʃizuN/ (ゆすぐ) のごとく /ʃi/ で現れることもある。

生塩論文が示す首里士族方言で前後に u がある時に [su] が保持されている語は、『おもろさうし』でその対応音は以下に示すとおり「す」で表記してある。

結ぶ      むすひ《結び》(巻六333、巻十一650)

盗む      ぬすとみや《盗人猫》(巻廿1366)      のすで《盗んで》(巻十<sup>(註14)</sup>546)

すぐれる      すくれて《勝れて》(巻一40、巻三99・100、巻九490)

この他に、楠は『沖縄語辞典』に /kusunuci/ [kusunufi]、『おもろさうし』に「くすぬき」(巻十538、巻十三891) と見える。

これらの語は『おもろさうし』においても、その「す」の仮名はやはり [su] の音をうつしていたと考えるべきであろう。

そしてより問題なのは、『おもろさうし』において「す」と「せ」の仮名が果して同じ /si/ を写していたと考えてよいかということである。

『おもろさうし』において「す」と「せ」の仮名が /si/ を写していたことをもっとも詳しく考察したのは、『おもろさうしの国語学的研究』(p46) の以下の記述である。

ス・ズ・ツ・ヅの母音はともに *i* に近い音となり、また、エ段に対応する母音も *i* に近い音となっていたと考えられ、おのおのセ・ゼ・テ・デとの混用例がある。

- (1) するむ…せるむ (オモロの同義語?)
- (2) よすぎいちへて<一六の二八>…よせきいちゑて<一四の二三> (濯ぎ出でて)
- (3) よ、すとみ…よ、せとみ (船名「世寄せ富」。前者が連体形で後者が名詞とも解釈できる)
- (4) よ、すきみ…よ、せきみ (神女名「世寄せ君」。前者が連体形で後者が名詞と

も解釈できる)

- (5) かずく二一の一一〉…かぜく二一の四八〉(風。二つのオモロは重複関係にある)  
 (6) せゑなめてく一四の三五〉(据え並めて)  
 (7) せつみく一四の三一〉(涼み?)

この記述のうち、「ツ・ヅ」が「テ・デとの混用例がある」というのは、そもそもその用例が挙っていないことからわかるとおり全くの誤謬である。現代首里方言でもツとテ、ヅとデに対応する音の区別は存在する(例 爪 tʃimi:手 ti:,水 midzi:腕 ʔudi)。

高橋が示す七例中の?が付いている二例は「す」と「せ」の混用例ではあるまい。(1)の「するむ」(巻十521)は、『沖縄古語大辞典』の「するむ」の項に、「未詳語。『せるむ』のオモロ表記か。または、『する』+『む』(するであろう)か。『おもろさうし辞典』には、『するらむ』の略か、とある。」とあり、岩波文庫本も「未詳語。するであろうの意に訳されるが、用例が一つしかなく不確かである。」としている。(7)の「せつみ」(巻十四1012)の「せ」を『沖縄古語大辞典』は「せ【堰】 水をせき止めたり、流水を調節するために造られたもの。」の項の用例として挙げ、岩波文庫本も「堰積み」としている。残りの五例はやはり「す」と「せ」の仮名の混用例であろう。また先述のごとく現代首里方言で [ʃi:] という精力・エネルギーを表す語を『おもろさうし』では「せい」・「せへ」・「せ」・「すへ」・「すゑ」と表記している。

このように『おもろさうし』において「す」と「せ」の仮名を混用した例があるのは事実であるけれど、二つの仮名の使用量の全体から見れば、混用例は部分的なものに過ぎず、二つの仮名は概略書き分けられている。そこでその混用例はあくまでもスとセの対応音の合流が部分的に起きていたことを示すにとどまり、スとセの対応音は果して完全に/si/に合流していたと考えてよいか疑問の余地なしとしない。「よすきいちへて」(巻十六1154)と「よせきいちゑて」(巻十四1004二例)は「濯ぎ出して」の意であるから、スとセの対応音が完全に合流していたので「す」と「せ」の仮名を等価に用いていたことを端的に示す例のようであるけれど、うがった見方をすれば、スの対応音とセの対応音が近づいていたために表記者が聞き間違えたのではないかと考えられなくもない。

この問題を考える上で興味深いのは、朝鮮語資料の「語音翻訳」(1501年)や中国語資料の『琉球館訳語』(16世紀前半成立?)・『中山伝信録』(1721年)等の外国語資料により沖縄方言の音韻史を考究した多和田眞一郎『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究』(以下『音声・音韻に関する歴史的研究』とする)である。同書の「第五章沖縄語の通時的考察 第一節 音声・音韻史」におけるサ行音の変遷の表(p443)を以下に示す(サの対応音は一貫して[sɑ]/sa/で変化がないので省略して引用)。

| 音声音韻 |             | 翻                | 館         | 信          | クリ       | 漂            | 現  |
|------|-------------|------------------|-----------|------------|----------|--------------|----|
| シ    | 音声          | ʃi               | ʃi        | ʃi         | ʃi       | ʃi           | ʃi |
|      | .....<br>音韻 | si               | si        | si         | si       | si           | si |
| セ    | 音声          | sɪ<br>si<br>(sɪ) | sɪ<br>sɪ̃ | si         | si<br>ʃi | (si)<br>(ʃi) | ʃi |
|      | .....<br>音韻 | sɪ               | sɪ        | si         | si       | (si)         | si |
| ス    | 音声          | su               | sɪ̃       | si         | si       | si           | ʃi |
|      | .....<br>音韻 | sɹ               | sɹ        | si         | si       | si           | si |
| ソ    | 音声          | so<br>sU         | so<br>sU  | (sU)<br>su | su       | (su)         | su |
|      | .....<br>音韻 | s⊙               | s⊙        | su         | su       | (su)         | su |

翻は「語音翻訳」、館は「琉球館訳語」、信は『中山伝信録』、クリは「クリフォード琉球語彙」(1818年)、漂は『漂海録』(1818年)、現は現代語。

この表まことに明快であるけれど、検討するに様々な問題点が浮び上がる。

まず、ソの対応音の音声・音価について、p473の注で『琉球館訳語』と『使琉球録』には『あそぶ(遊)』一語しかない。これは、現代語は[ʔafibuN]で、『ソ』が[ʃi]に対応する形となっていて、例外的である。おそらく『アスブ』に対応するのであろう。」としている。「遊ぶ」は『琉球館訳語』の「人事門」に「鞠躬 烏孫必」と見える。琉球方言の「遊ぶ」の語幹が \*aso ではなく \*asu に遡るということは正しい。先述のように『おもしろさうしの国語学的研究』(p106)が「現在の琉球方言でもアスに対応している。」とし、『沖縄古語大辞典』も「あすぶ 【遊ぶ】」という沖縄祖語形を立てている。ゆえに『音声・音韻に関する歴史的研究』がp443の表のソの対応音の『琉球館訳語』の音訳字に「孫」(実際には誤植で遜となっている)を示すのは不当である。多和田がその後に表した『沖縄語漢字資料の研究』の「I『琉球館訳語』の研究」の「3.音訳字一覧」によれば、「孫」はスの対応音の音訳字として七例、ズの音訳字として一例現れる。『使琉球録』(1534年)においても、『沖縄語漢字資料の研究』を閲する限り「240 <鞠躬 烏遜皮>」(p101)の一例しかない。濁音ゾの対応音も『琉球館訳語』と『使琉球録』には見えず、結局両書ではソの対応音の実態は不明である。

「語音翻訳」(田中健夫『海東諸国記』より引用、以下同じ。)では、ソの対応音を含む言葉は「(99)菜蔬 so-nai」のようである。この語は、『おもしろさうし』巻八432番オモロ

に「そない」（仲吉本の「言葉聞書」に「和物也」とある。）と見え、『沖縄語辞典』に「sunee（名） 酢の物。」と見える言葉を指すらしい。濁音ゾの対応例は「⑨旧年 ku-co」である。これは本土古語コゾの対応例で、『混効験集』に「こそ 去年」（乾・時候）とあり、『沖縄語辞典』に「kuzu（名） 去年。」（/kuzu/は [kudzu]）と見える言葉である。「語音翻訳」ではスの対応音は「**[107]** 硯 se-c (j) <sup>(iE16)</sup> e-ri」・「**[108]** 墨 se-mi」の如く se で表記してある。

服部四郎「『語音翻訳』を通して見た15世紀末の朝鮮語の発音」は、「語音翻訳」が記録した首里方言は、既にオ段音とウ段音に対応する母音音素が /u/ [u~U~Ū] に合流し、イ段音とエ段音の対応音の母音は /i/ [i~I~Ī] に合流し、イ段音とエ段音とは子音の口蓋化の有（イ段音）無（エ段音）で対立していたとする立場から、/a/・/i/・/u/・/w/ [w]（/w/は/s/と/c/と/z/の後に現れる）の四母音音素とする。そして「so-nai」を [sUnai] /sunai/、「ku-co」を [kūdzU] と推定する。そして「**[107]** 硯 se-c (j) e-ri」の音価を [sūdzuri] と推定し、「[suw] /sw/は音韻としてはっきりと/su/とは異なっていたと認められる」と説く。

『音声・音韻に関する歴史的研究』（p423）は、「語音翻訳」の言語の母音は/a/・/i/・/u/・/w/・/i/・/θ/の六母音音素とし、「/i/は\*/e/から/i/へ移行する途中の姿であり、/w/は/s/・/ツ/・/ズ/・/ヅ/において認められるものであるし、/θ/は\*/o/から/u/への移行を見せはじめていると判断される/オ/である。」と述べる。そして同書（p39）は服部が [U] /u/と推定したハングルの o について以下のとおりに説く。

音価は、ハングルの「u」で記されたものは、それと同じ [u] としてよいが、「o」で表記されたものについては、一考の要がある。\*/o/から/u/への変化過程にあると考えられるから、もとの [o] よりは [u] に近づいた音であったと言えよう。[U] あたりか。

[u] /u/と対立する母音の音価として [U] を推定する場合、服部の以下の言を論破する必要がある。

或る言語が短い [i] と [I] ならびに短い [u] と [U] の音韻的区別を有するということは、ことにその言語が日本語の本土方言や琉球方言のようにスタッカートの構造を有する場合には、まずあり得ないと思う。或る学者たちの転写において [i] [I] [u] [U] で表わされる英語の母音は、実は、音声的にはそれぞれ [i:] [I] [u:] [U] なのである。

「語音翻訳」の記録した琉球方言が o>u の過渡期であるならば、奄美大島の方言でオ段音の対応音が [o] で現れることから、**「語音翻訳」** のハングルの「o」は [o] を写し、「so-nai」は [sonai]、「ku-co」は [kūdzō] である蓋然性が高いのではなかろうか。

もっとも多和田はその後さらに続けて以下のとおり締めくくる。

さらに言えば、\* /ウ/と\* /オ/とが、状況に応じて、[u] とも [o] とも [U] ともなったというのが、あるいは、実際に近いのかもしれない。

この言は、先に示した与路島方言のごとく、o > u の変化が進行していると同時に、u > o の変化も起きているという意味なのであろうか。

当面の問題で重要なのは、スとセの対応音がいつ合流したかということである。

『音声・音韻に関する歴史的研究』の「第二章 沖縄語漢字資料の研究」の「第一節『琉球館訳語』の沖縄語」では、検討の結果を『語音翻訳』の分析結果につけ加えるべきものはない。」とする。ならば、なぜ先の表でセとスとの音価を「語音翻訳」と『琉球館訳語』で異なるものにするのであろう。事実、同書の「第五章」(p471)では「現代語の [ʃi]・[(d)ʒi], [tʃi]・[(d)ʒi] に到る『ス・ズ, ツ・ヅ』の変化について考える。」とし、「細かいバリエーションは除外して」と断った上で以下の表を示している。

|   | a  | b   | c  | d      | e  | f  |
|---|----|-----|----|--------|----|----|
| シ | si | si  | ʃi | ʃi     | ʃi | ʃi |
| セ | se | sī  | si | ʃi, si | ʃi | ʃi |
| ス | su | suu | sī | si     | si | ʃi |
| ソ | so | su  | su | su     | su | su |

a は「語音翻訳」以前で「多分15世紀末まで」、d は「クリオード語彙」と『漂海録』、e は『沖縄語辞典』、f は現代語。『琉球館訳語』が a から b の間、『使琉球録』が c、『中山伝信録』と『琉球入学見聞録』(1764年)が c と d との間あたりに「位置することになるか。」と述べる。

『琉球館訳語』が a から b の間であるとする、p443の表でスを [sī] としているのはどう考えればよいのであろう。多和田の「やすり(鑪)がヤシーに変わるまで—沖縄語の『スリ』から『シー』への変化—」では、「語音翻訳」のスの対応音は [suu]、『琉球館訳語』のスの対応音は [(su) sī] となっている。

また、この表ではセとスの対応音は e の時代すなわち『沖縄語辞典』まで区別があったことになる。ところが p443の表では『中山伝信録』からは /si/ に合流したことになる。これらは「細かいバリエーション」に含まれることなのであろうか。実際は『沖縄語辞典』では、スの対応音は /ʃi/ [si~ʃi] でセの対応音は /ʃi/ と /si/ [ʃi] なのである。同辞典の「解説篇」には、「貴族・士族の青年男子の場合は、標準語の『サ (sa)』『シ (si)』『ソ (so)』の子音は s に、標準語の『ス (su)』の子音は ʃ に、(中略) 対応するのがふつうである。『セ (se)』の子音は、人または語によって s, ʃ の両方の場合がある。」とあり、注に「島袋盛敏氏の発音では s の場合が多く、比嘉春潮氏の発音では ʃ の場合が

多いようである。」とある。

ストセの音の対応音の関係は複雑なようである。

では、オモロ語においてストセの対応音は果して完全に合流してしまっているのであろうか。この問題を考える上で決め手となるのは「せさ」(巻十一608・巻十五1105二例・巻廿一1428)と「すさへ」(巻十三750・巻廿1337二例・1338二例・1339二例・1340二例・1341二例・1342二例・1343・1344・1345・1347二例)であろう。

『混効験集』に「<sup>(注17)</sup>すざへ 兄の事也 惣して我より長しき方は俗に如斯申なり」と見える。『おもろさうし辞典』に「せさ(兄者)兄。おもろ時代の「せさ」を現代では『シチャ』とよんでいる。」・「-すさへ(-兄部)-兄。『すさ』は兄。「へ」は階層をあらわす敬称辞。但し『やまきたらすさへ』の如く個人をいうことが多い。」とあり、『沖縄古語大辞典』に「せざ<sup>㊦</sup> 兄弟姉妹のうち、兄・姉をいう。兄者。姉者。」・「せざーべ【せざ部】<sup>㊦</sup> 兄部。『せざ』は兄、『べ』は年齢・身分などの集団・階層を表す語。『せざべ』はオモロ例の『やまきたらすさへ』の如く個人をいうことが多い。」と見える。『沖縄語辞典』には「*ʃiiʒa* (名) *ʔuQtu* (年下, 弟妹) の対。⊖年上 (の者)。年長 (者)。⊖兄姉。年上の兄弟。兄または姉。」と見える (/*ʃiiʒa*/は [*siidza*])。

なお「せさ」の語源説は管見に入った限り以下の四説がある。

- ㉑ 兄者 ㉒ 先者 ㉓ 姉兄 ㉔ 父人

可能性を認め得るのは㉑と㉒のみ。㉓と㉔は不可。

㉑は法政大学沖縄文化研究所小湾字誌調査委員会『浦添・小湾方言辞典』の「*ʃi:dʒagata*」の項に「『兄者方』の義か。年上の方々の意。」と見える。また『混効験集』の「おめすざ兄の事」(乾・人倫)について『琉球古語辞典 混効験集の研究』が「兄の敬語。『おめ』は『思い』で敬意を表す。『すざ』は『せざ』とも表記される。『す』『せ』は音価が同じ。『ざ』も実質はジャと発音されているので、兄者(せ<sup>マ</sup>ちゃ)のことか。」と説いている。また『おもろさうし辞典』が「せさ」に兄者という漢字を宛てているのは語源をそう考えているということであろうか。

㉒は『音声・音韻に関する歴史的研究』に見える説で、「語音翻訳」の「哥哥 *sin·ca*」について「『先者(センザ)に対応し、*[sindza]*であったろう。」(p48)と説いている。

㉓は『図説琉球語辞典』の「兄」の項に見える説で、以下のとおり述べている。

セザ形は全球型の分布を示す最も基本的な語形である。(中略)奄美佐仁の *siɔda*, 沖縄粟国の *ʃi:da*, 宮古大神の *sudaɔ*, 八重山石垣の *ʃidʒa:* などから, \**seda* にさかのぼる。(中略)「姉」を表す \**se* と, 「兄」を表す \**da* が結合して \**seda* (\*姉兄) ができたと考えられる。

㉔は『沖縄北部・南部方言の記述的研究』(p343)に見える説で、「『シザ』系というのは『スダ』『スジャ』『シージャ』などとあらわれるもので、『シシ(父)ア(人)』からな

ると解される。」と説く。

◎は祖形を／\*seda／としているのが決定的な誤りである。『図説琉球語辞典』の論のうち、「宮古大神の suda:」と「八重山石垣の fid3a:」という記述は問題がある。

まず大神島の [suda:] は不正確な表記である。法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言 宮古大神島』で中本が担当した「語彙」では「suḍa (年上) 男女の別なく用いる。」(p49) となっている。

そして「八重山石垣の fid3a:」は中本に混乱があったようである。図の方に [fid3a:] が見つからないのである。図を見ると石垣島は、川平と大浜が [çid3a]、石垣(島の中心地で四箇<sup>しつか</sup>と呼ばれる石垣・大川・登野城・新川の四集落を指す)と宮良が [ad3a]<sup>(注18)</sup> となっている。中本正智『琉球語彙史の研究』では、「年上」の「八重山川平」の語形が「fid3a また çid3a」(p111) となっている。「八重山石垣」とは、石垣島全体を指すのであろうか、それとも四箇を指すのであろうか。この辞典の「舌」の項に「八重山川平」という表現があり、この辞典の「2 琉球方言の特色」の「八重山方言」の「石垣島の項」の「八重山の中心地は石垣(シカ、四箇)である。」という言から、「八重山石垣」は石垣島ではなく四箇を指していると考えたところである。平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球先島方言の総合的研究』の「兄」の項 (p254) では、石垣は [fid3a]、大浜は [fi:d3a]。平山輝男『南琉球の方言基礎語彙』の「あに(兄)」の項 (p84) では石垣は [çid3a] (同書の「話者一覧」を見ると石垣方言の話者の「言語形成地」はみな四箇)。四箇の一つ新川出身の宮城信勇氏に電話でお尋ねしたところ、[fid3a] であり、呼びかける時に [fid3a:] と末尾の母音を伸ばすとのことであった。

『図説琉球語辞典』が示す「せざ」の対応形が／\*seda／ではなく／\*seza／に遡ることは、同辞典で、ダ行音の対応という観点から「枝」の項と、ザ行音の対応という観点から「風」の項と比較してみればわかる。

「枝」の項では、大神島は [jud̥a]、佐仁と粟国島は [jud̥a]。石垣島は石垣と大浜を含む全地点で [jud̥a] である。

「風」の項では、大神島は [kad̥i]、佐仁は [had̥zi]、石垣島は石垣と大川を含む全地点で [kad̥zi] である。

大神島ではザ行音とダ行音に対応する子音が [d̥] に合流したため [suḍa] が／\*seza／に遡るのか／\*seda／に遡るのか判別できないけれど、佐仁の [siḍza] と「八重山石垣」の [fid3a: (çid3a)] は／\*seda／ではなく／\*seza／に遡ることを示している。

問題は「風」の項で粟国島が [kad̥zi] となっていることである。ここからは同島の [fi:da] は／\*seza／ではなく／\*seda／に遡るように見える。ところが同辞典の「2 琉球方言の特色」の粟国島の項に「ダー-da: (座), デイン din (銭)」という例が見える。この辞典の「地点・話者一覧表」の粟国島の項は前浜という地名を記している。私が粟国島で

調査したところ、同島は東・西・浜の三集落から成り立ち、浜集落の方言だけがザ行音の子音に [d] が対応する。たとえば黒子・痣（「疵師説阿佐」『廿卷本和名抄』）の対応形を東集落の玉寄武一氏（1927年生）と西集落の新城繁盛氏（1927年生）は [ʔadza] と発音したのに対し浜集落の伊佐ハル氏（1912年生）は [ʔada] と発音した。氏によれば年長者を [ʃi:da] と言うとのことであった。玉寄氏と新城氏の発音は [ʃi:dʒa]。そして風を伊佐ハル氏は [kadʒi] と発音したのであるけれども、方角をお聞きすると南風を [ɸe: nu kadi]、西風を [nifi kadi] と発音した。そして同じく浜集落の末吉ヤス氏（1916年生）にお聞きすると、氏は風を [kadi] と発音した。この他にも浜集落で風を [kadi] と発音する人はいたのであるけれども、現在の浜集落では [kadʒi] と発音する人が多い。末吉氏の話ではこれは東・西集落の影響ではなく、那覇方言が入りこんだものだという。ここから粟国島の [ʃi:da] も /*\*seza*/ に遡る語形であることがわかる。

④は第一音節が /*\*si*/ に遡るとしているところが決定的な誤りである。たとえば佐仁方言は私の調査でも、年上を [sɪdza] と言う。この方言では [sɪ] はスに対応する（先述）と同時にセにも対応する（瀬 sɪ 汗 ʔasi）。そしてシには [ʃi] が対応する（白い ʃiruka 肉 ʃiʃi）のである。また『沖縄語辞典』の /*\*siiza*/ にしても、先述のとおり /*\*si*/ はセないしスに対応し、シには /*\*si*/ が対応するのであるから、/*\*siza*/ ではなく /*\*seza*/ に遡ることを示す。

結局「せざ」の語源で可能性を認め得るのは④の「兄者」説と⑤の「先者」説の二つである。「兄者」説の難点は、本土古語のセが女から男をよぶ語で、年上にも年下にも使うという点である。『琉球古語辞典 混効験集の研究』の「すざべ」の項に「『混効験集』の編者は、本土古語のせじゃ（兄者）を想定しているか。」とあるけれど、「せじゃ」という語は『日本国語大辞典 第二版』他通行の辞書では私は見出せない。「先者」の蓋然性が高いか。ただし「先者」という語は、日本語の辞書はもちろん『大漢和辞典』でも見出せないけれど。

この語は「語音翻訳」に「⑤哥哥 sin-ca」と見える。「語音翻訳」にはこの語以外にセの対応音が現れないのであるけれど、スの対応音は「〔107〕硯 se-c (j)e-ri」・「〔108〕墨 se-mi」の如く se で表記してあるわけであるから、スの対応音と別音であったことがわかる。『琉球館訳語』にも「兄 先扎」（人物門）とあり、この「先」は他に「大使臣 先度」（人物門）と見える。「大使臣 先度」とは『沖縄語辞典』に「siidu（名）[勢頭] かしら。親分。問目。下層階級の語。」と見える語であろう。首里士族語では先述のとおりスには /*\*si*/ ではなく /*\*si*/ が対応するのであるから /*\*siidu*/ の /*\*sii*/ もスではなくセと言えそうであるけれど、「下層階級の語」というのが問題である。とは言え、『沖縄古語大辞典』に「せど【船頭・勢頭】㊦㊧ ①船の責任者。原義は『船頭』であるが、転じて首里王府の官僚機構の中で職制化された職名としては、『勢頭』の字を宛て、頭（かしら）役の

意に使われている。」と見え、「先度」の「先」をセの対応音を写していると考えることに問題はないようである。『沖縄語漢字資料の研究』の「I 『琉球館訳語』の研究」の「4.音訳字の音価推定」は、「先」の「示そうとしたであろう音価」を [sIn] とし (p72)、濁音の前に現れるという点で「先」と同じ環境にあるスの対応音の音訳字である「孫」のそれを [sum~sun] とする (p71)。同書は「先扎」の音価を [sIndʒa]、「先度」の音価を [sIndU:] と推定している (p89)。同書から「先」と「孫」の「示そうとしたであろう音価」の推定の根拠にした『中原音韻』(1324年)・『西儒耳目資』(1626年)・『東国正韻』(1447-8年)・『訓蒙字会』(1527年)の音価を引用して示す。

『中原音韻』 『西儒耳目資』 『東国正韻』 『訓蒙字会』

|         |      |      |      |        |
|---------|------|------|------|--------|
| 先 (p72) | sien | sien | sjɔn | 跣 sjɔn |
| 孫 (p71) | suən | sun  | son  | son    |

オモロ語の「せさ」と「すさへ」の「すさ」が別音を写していると考えべき根拠はない。ただ「すさへ」は『おもろさうし』において卷十三750の一例を除けば全て卷廿に集中していることが問題になる。その時、『混効験集』の坤卷に「すざへ 兄の事也」とあることが重要な意味を持つ。『『おもろさうし』書き改めと『混効験集』編纂について』によれば、『混効験集』の「すざへ」は、再編『おもろさうし』卷十三の原資料の一つである「嘉靖三十二年やらさもりまうはらいときみまの物のみ御前みせゝる御双紙」からの引用である。従って卷十三の「すさへ」は1710年の「書き改め」以前の段階から存在した表記ということになる。このことから、『おもろさうし』では同じ形態素/\*sʲiza/を単純語と合成語によって「せさ」と「すさ」に書き分けたと考えざるをえない。やはりオモロ語の段階ではセとスの対応音は合流していたと考えるべきであろう。

『おもろさうし』では si の音を「す」と「せ」の二つの仮名で表記しているわけであるけれど、この二つの仮名は概略書き分けてある。この二つの仮名の書き分けの基準は何であろうか。本土方言との対応であろうか。祭式歌謡であるオモロと異なり、日常の口頭語ではスとセの対応音が対立していたので、日常の口頭語との対応から書き分けたのであろうか。「せさ」と「すさへ」の場合は、この二つの説明はどちらもあてはまらない。「す」と「せ」の二つの仮名の書き分けの原理を解明することは重要な課題であろうと私は思う。

(本文中、直接お話を伺った方の名にのみ氏を付けた。)

付記 本論の priority に関して次の二点を記しておく。

○本論の本格的な調査に取りかかった時、スラ場のスラを梢と決めこんでいた私は『琉球古語辞典 混効験集の研究』の「造船所のことをスラバというが、ここの『すら』とは別。」という言に合点がいらず、著者の池宮正治氏に真意をお聞きするために電話をした。氏は

スラバの語源について断定的な発言はなさらず「修羅説もありますね。」と述べるに留まられたのであるけれど、その際の会話の中の「僕は『おもろさうし』では) すに二つあったと思いますよ。」という氏の言葉に啓発された面が大である。

○沖縄本島今帰仁村与那嶺方言の [k'uni:] (国) が/\*koni/に遡ることは既に服部四郎『琉球方言と本土方言』が指摘しているわけであるけれど、その [k'uni:] が『おもろさうし』の「こに」に対応する語形であることは、かりまたしげひさ氏の御教示で気がついた。

### 注

- 1 岩波文庫本の上巻の凡例には「大意」とあり、下巻の凡例には「口語訳」とある。
- 2 この辞典の凡例は「見出し」について以下のように述べている。

見出しは、文献資料の表記と語源を手掛かりにして再構した形にした。再構にあたっては、沖縄・宮古・八重山・奄美の諸方言、および日本古語を参考にした。琉球方言で再構される形と日本古語の形が違い、どちらが古い形か決められない場合は、琉球諸方言で再構される形にとどめた。したがって、日本祖語形ではなく、沖縄祖語形である。

凡例によれば、見出しの下の略号の意味は以下のとおり。

㊦『おもろさうし』所出のもの ㊧『南島歌謡大成 沖縄篇上』所収の古謡 ㊨『南島歌謡大成 沖縄篇下』所収の琉歌など ㊩『琉球戯曲集』所収の組踊 ㊪『混効験集』所収の語 ㊫複合語中の重要な語素

- 3 京大本の竹富島の竹は开。その頭注に「开ハ竹ノ字以下倣之」とあるのにより竹に改めて引用した。
- 4 この「せ」の字は誤りではないかと思ったけれど、石垣市総務部市史編集室『石垣市史叢書1 慶来慶田城由来記・富川親方八重山島諸締帳』でも「すら下せ」(p21)となっている。
- 5 従来の石垣方言の研究で中舌母音 [i] とされてきたこの音は現在問題となっている。上村幸雄「音声研究と琉球方言学」は、従来の宮古方言の研究でやはり中舌母音 [i] とされてきた音を D・Jones 以来の母音四角形の枠組みに収まらない舌先母音 [ɪ] とした上で、以下のとおり説く。

石垣など八重山方言の、標準語の /i/ に対応するやはり中舌的音色を有する母音、この母音は舌先は /s/ の位置からずれているのだが、この母音も、また秋田、青森など、東北北部方言の、おなじく標準語の /i/ に対応する中舌母音とみなされていた母音も、舌の最高点と狭窄の位置からみて中舌母音ではなく、舌先的とみなさなければならないことがパラトグラムその他の資料からみて確実となった。この

石垣など八重山方言の母音、そして秋田などの母音をかりに [i] のようにあらわしておこう。

本論では話者の宮城信勇氏が提供して下さった「石垣方言の音韻音節表 動詞活用表」(氏が作成中の『石垣方言辞典』の一部)に従い [i] で表記した。

- 6 「石垣方言の位置づけ」は、「石垣方言の /i/ は、奄美徳之島諸方言に典型的にみられる『中舌母音』とは調音の方法も音色もことなっていて、宮古諸方言と同様『舌先母音』とみなすべきだろう。しかし、これを音韻的に表記するときには、これまでの慣例にしたがって中舌母音の記号 /i/ をつかうことにする。」と述べる。
- 7 現代首里方言と那覇方言の音韻の特徴的な相違点は以下の三点であろう。①アクセント。②例えば太陽を首里方言では [ti:da] というのに対し、那覇方言では [ti:ra] というようにダ行音がラ行音化すること。③記号で表記し難いリズムの相違(首里方言の話し手からすれば那覇方言は早口に聞こえるという)。
- 8 垣の花は現在米国に占領されている。
- 9 『沖縄語辞典』が「šii (名) 巢。」の如く /ši/ で表記する音は [si]。この音は現代首里方言では失われ [fi] となっている。故に仮に久手堅憲夫氏の祖父君が [\*siraba] と発音したならば、久手堅憲夫氏は [firaba] と聞いたであろう。
- 10 『日本国語大辞典 第二版』が示す八丈島方言の「しらぎ」と江の島方言の「すらぎ」を出典に当たって確かめたいと私は思った。そして同辞典の「方言資料および方言出典番号一覧」から、「しらぎ」の方は最上孝敬「漁撈の労務組織」に、「八丈島末吉村で濱役又は濱ガカリといふのは、舟の見廻りをし暴風雨の時などシラギ(舟の下に敷く丸太)の流失を見張つた。」とあるのを確認した。一方、「すらぎ」の方は出典番号054で、雑誌『方言』が出典ということである。ところが『方言』収録のどの論文に「すらぎ」が現れるのかがわからない。第3巻4号収録(1933年)の山本靖民「神奈川県方言資料」かと思ったけれど、そこに「すらぎ」は見出せない。御教示を仰ぎたい。
- 11 [joda] が o を保持する語形ということをいぶかしがる向きもあろうから、『図説琉球語辞典』の「枝」の項の論を以下に示す。
- つまり、原日本語にエダとヨダを生んだ祖形があつて、本土でエダに、琉球でヨダに発達したと推測される。さらに琉球で \*joda→juda の変化により、現在のユダ系を生んだのである。
- この辞典の「枝」の項は与路島方言の語形を [jeda] としている。これは話者が共通語を答えたものであろう。なお、『おもしろさうし』で枝は「よた」(巻四175)と「ゆた」(巻五281)の両表記がある。
- 12 卵は『混効験集』に「こかむにやい 鶏卵の事 俗語こか共玉子共いふ」(乾・飲食)とある。『琉球古語辞典 混効験集の研究』は、「こがむにやい 玉子の敬語。『こが』

- は『こかい(子貝)』の『い』脱で卵のこと。『大隅肝属郡方言集』にも玉子焼きのことを『こがやき』とある。『むにやい』は『みなり(実実り)』(p120)とする。
- 13 例えば須山名保子「喉頭音化の有無の対立について —奄美大島大和村大和浜方言の閉鎖音の場合—」は、「多くの近隣諸方言では本土方言の *o* が *u* で現れ、大和浜方言も例外ではない。但し、*a* か *e* を持つ音節が前か後かに有る語では、*o* は *o* のままである。本土の *u* までが *o* となるものの方が、*u* のままのものが多い。」として、「*ʔoʼja* 親 *ʼonagu* 女 / *moxasi* 昔 *ʔoθa* 歌」という例を挙げている。また上村幸雄・須山名保子「奄美方言」の「概説」(上村幸雄執筆)に「*k'umo*『雲』の名瀬における、すでに聞かれなくなった古い発音 *k'omo* の *k'o* のように、前後の母音の影響によって、母音の広さが変化する場合など、例外的対応の例も少なくない」と見える。
- 14 尚家本で用例の箇所は欠損。仲吉本から引用。
- 15 『音声・音韻に関する歴史的研究』の「第二章」の「第一節『琉球館訳語』の沖縄語」は、「烏孫必」について「対応語無し。『語音翻訳』に『*a·sum·pi* (遊<sup>ママ</sup>べ、か) とあるのは参考になるか。」(p142)としている。多和田の『沖縄語漢字資料の研究』の「I『琉球館訳語』の研究」の「1.本文翻刻・対応日本語・通し番号」では、「烏孫必」の「『対応(すると考えられる)日本語』(和訳)」を「『あそび?』(遊び)」としている。「3.音訳字一覧」によれば、『琉球館訳語』で「烏」は、ウの対応音の音訳字として44例、オの対応音の音訳字として4例使われているけれど、アの対応音の音訳字に用いた例は他にない。このことは「烏孫必」を「遊び」と解すること自体の問題点となる。
- 16 田中健夫『海東諸国紀』の「琉球国〈語音翻訳〉」の「凡例」(p278)に、「推定しうる本来の音を必要に応じて括弧内に示す。例えば *c(j) e·ma* 「どこ」はハングル *c* がこの場合濁音に対応していることを示し、」とある。
- 17 外間守善『混効験集 校本と研究』は「すぎへ」とし、『琉球古語辞典 混効験集の研究』は「すぎべ」としている(両者共にテキストは評定所本)。沖縄県教育委員会による評定所本の影印本を見ると「すぎへ」である。影印本の「あとがき」に「マイクロフィルム撮影と焼付の都合から、朱書の一部が不明瞭となったので、朱書一覧表を別刷で加えることにした。」とあるけれど、その朱書一覧表にこの語は載っていない。
- 18 [*adʒa*] の語源を『図説琉球語辞典』は「\**a* (吾) \**da* (兄)」とする。『沖縄北部・南部方言の記述的研究』(p303)は宮良方言において、長兄に「アーザー [*a:dza:*]」、長姉に「アーザ [*a:dza*]」を示し、語源を「ア(吾) + シザ(年上の者)」としている。

## 参考文献

- 石垣市総務部市史編集室(1991) 『石垣市史叢書1 慶来慶田城由良記・富川親方八重山  
島諸縮帳』石垣市役所
- 池宮正治(1980) 『おもろさうし諸本校異表』(『尚家本おもろさうし複製版別冊付録』ひるぎ社)
- 池宮正治(1987) 「鳥 船」(おもろ研究会『おもろさうし精華抄』ひるぎ社)
- 池宮正治(1995) 『琉球古語辞典 混効験集の研究』第一書房
- 糸満市史編集委員会(1991) 『糸満市史 資料編12 民俗資料』糸満市役所
- 伊波普猷(1929) 『校注琉球戯曲集』春陽堂
- 伊波普猷(1939) 「あまみや考」(『日本文化の南漸一をなり神の島続篇』楽浪書院)
- 伊波普猷(1942) 『校注混効験集』(『古琉球 改訂初版』)
- 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重(1940) 『琉球国由来記』名取書店
- 上原初美(1976) 「糸満における漁業ニンジュ」(琉球大学民俗研究クラブ『沖繩民俗』22)
- 上村幸雄・須山名保子(1993) 「奄美方言」(『言語学大辞典 補遺・言語名索引編』三省堂)
- 上村幸雄(1997) 「音声研究と琉球方言学」(言語学研究会『ことばの科学8』むぎ書房)
- 内間直仁・新垣公弥子(2000) 『沖繩北部・南部方言の記述的研究』風間書院
- 大友信一・木村晟(1979) 『琉球館訳語 本文と索引』小林印刷株式会社出版部
- 沖繩久米島調査委員会(1983) 『沖繩久米島 資料編』弘文堂
- 沖繩県教育委員会(1984) 『評定所本 混効験集』
- 沖繩県教育委員庁文化課(1991) 『沖繩県文化財調査報告書第101集 西表島 船浦スラ  
所跡』沖繩県教育委員会
- 沖繩県立博物館(1980) 『尚家本おもろさうし(複製本)』ひるぎ社
- 沖繩古語大辞典編集委員会(1995) 『沖繩古語大辞典』角川書店
- 屋崎一(1987) 『与路島に残る おやふちぬ言葉』自費出版
- 生塩睦子(1987) 「伊江島方言の音韻対応」(琉球方言クラブ30周年記念会『琉球方言論  
叢』)
- 生塩睦子(1999) 『沖繩伊江島方言辞典』伊江村教育委員会
- 嘉手刈千鶴子(1978) 「『おもろさうし』書き改めと『混効験集』編纂について」(『南  
島史学』11)
- かりまたしげひさ(1995) 「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム(上)」(日本東洋文  
化論集』創刊号)
- かりまたしげひさ(2001) 「石垣方言の位置づけ」(鈴木重幸『琉球八重山方言の動詞の研究』  
文部省科学研究費補助金基盤研究c2.平成11年度～平成12年度研究成果報告書)
- 国立国語研究所(1963) 『沖繩語辞典』大蔵省印刷局
- 崎浜秀明(1978) 『続沖繩旧法制史料集成 第二巻 女官御双紙・服制』私家版

- 島村幸一(1992) 「オモロの表現 —く生産叙事>の視点から—」(『沖縄文化研究』18)
- 須山名保子(1992) 「喉頭化の有無の対立について —奄美大島大和村大和浜方言の閉鎖音の場合—」(沖縄言語研究センター『琉球列島における音声の収集と研究I』)
- 高橋俊三(1991) 『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院
- 高良倉吉(1998) 『アジアのなかの琉球王国』吉川弘文館
- 田中健夫(1991) 『海東諸国紀』岩波書店
- 多和田眞一郎(1996) 「やすり(鑢)がヤシーに変わるまで —沖縄語の『スリ』から『シー』への変化—」(平山輝男博士米寿記念会『日本語研究の視点 下巻』明治書院)
- 多和田眞一郎(1997) 『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究』武蔵野書院
- 多和田眞一郎(1998) 『沖縄語漢字資料の研究』溪水社
- 鳥越憲三郎(1968) 『おもろさうし全釈』清文堂
- 仲里村史編集委員会(1994) 『仲里村史 第三巻 資料編2 近世・近代の文献資料』仲里村役場
- 仲宗根政善(1983) 『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
- 仲原善忠(1957) 『おもろ新釈』琉球文教図書
- 仲原善忠・外間守善(1965) 『校本おもろさうし』角川書店
- 仲原善忠・外間守善(1967) 『おもろさうし辞典・総索引』角川書店
- 仲原善忠・外間守善(1978) 『おもろさうし辞典・総索引 第二版』角川書店
- 仲程正吉(1967) 『沖縄風土記全集 第一巻 国頭村編』沖縄風土記刊行会
- 仲程昌徳(1970) 「おもろにあらわれた比喩的表現法としての鳥」(『沖縄文化』30・31)
- 中村栄春(1982) 『私とふるさと』那覇出版社
- 中本正智(1976) 『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
- 中本正智(1981) 『図説琉球語辞典』金鶏社
- 中本正智(1983) 『琉球語彙史の研究』三一書房
- 中本正智(1985) 「おもろ時代の仮名遣からみた音韻」(『沖縄文化研究』11)
- 中本正智・比嘉実・クリスドレイク(1989) 「おもろ鑑賞—琉球古謡の世界・59」(『言語』18巻8号)
- 服部四郎(1976) 「琉球方言と本土方言」(伊波普猷生誕百年記念会『沖縄学の黎明—伊波普猷生誕百年記念誌—』沖縄文化協会)
- 服部四郎(1979) 「音韻法則の例外 —琉球文化史への一寄与—」(『日本学士院紀要』36巻2号)
- 服部四郎(1979) 「『語音翻訳』を通して見た15世紀末の朝鮮語の発音」(『言語の科学』7)
- 波照間永吉(1989) 「『おもろさうし』の記載法 —記載の省略とオモロの本文復元をめぐる—

## 一)『文学』57巻11号)

- 波照間永吉(1991) 「オモロ反復句一覧 巻別」(沖縄県立芸術大学『沖縄芸術の科学』4)
- 比嘉実(1993) 『沖縄研究資料14 尚家本『おもろさうし』』法政大学沖縄文化研究所
- 東恩納寛惇(1950) 『南島風土記』沖縄文化協会
- 東恩納寛惇(1951) 「くるまがさ」(『文化沖縄』第3巻4号)
- 平山輝男・大島一郎・中本正智(1966) 『琉球方言の総合的研究』明治書院
- 平山輝男・大島一郎・中本正智(1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 平山輝男(1988) 『南琉球の方言基礎語彙』桜楓社
- 法政大学沖縄文化研究所(1977) 『琉球の方言 宮古大神島』
- 法政大学沖縄文化研究所小湾字誌調査委員会(1995) 『浦添・小湾方言辞典』
- 外間守善(1970) 『混効験集 校本と索引』角川書店
- 外間守善・西郷信綱(1972) 『日本思想大系 おもろさうし』岩波書店
- 外間守善(2000) 『おもろさうし』岩波書店
- 外間守善・玉城政美(1980) 『南島歌謡大成Ⅰ 沖縄編上』角川書店
- 外間守善・波照間永吉(1996) 『定本琉球国由来記』角川書店
- 外間美奈子・山田尚子(1994) 「那覇民俗語彙」(沖縄言語研究センター『那覇の方言 那覇市方言記録調査Ⅱ 沖縄言語研究センター研究報告4』)
- 牧野清(1983) 「『すら所』『すら場』考」(『琉球新報』1983年1月11日)
- 宮城鉄行(1993) 『国頭村 安田の歴史とシヌグ祭り』未来工房
- 宮良當壯(1930) 『八重山語彙』東洋文庫
- 最上孝敬(1949) 「漁撈の労務組織」(柳田国男編『海村生活の研究』日本民俗学会)
- 琉球大学民俗研究クラブ(1961) 「国頭村 安田部落 シヌグまつり調査報告」(『民俗』4)

## 謝 辞

貴重な時間を割いて方言を教えて下さった各地の話者の方々に厚くお礼申し上げます。

その他、例えば以下の方々から多大の御援助を頂きました。

奄美大島笠利町佐仁での調査に際し、松岡竹宏氏の御援助を頂きました。

沖縄本島国頭郡国頭村安田での調査に際し、ホテル・シドマスインの金城均支配人の御援助を頂きました。

沖縄本島糸満での調査に際し、安田栄一氏をはじめとする糸満市教育委員会の方々の御援助を頂きました。

生塩睦子氏は一面識もない私の手紙での求めに応じて伊江島方言の話者への紹介状を書いて下さり、さらに御著作『伊江島のはなしことば』(伊江村教育委員会)を贈って下さいました。

伊豆山敦子氏からは与那国島の話者を御紹介頂きました。

那覇市文化協会の佐藤善五郎事務局長にはなにからなにまでお世話になりました。この他訪れた各地で実にたくさんの方々の御援助を頂きました。

牧野清氏が2000年10月22日に他界された。私はかなり以前からスラ場（所）という言葉に興味を持ち、氏の論考は初期の段階で読んでいた。しかし、当初はそのスラを梢と決めこんでおり、さらに歴史学の門外漢であるゆえ、よもや氏にお目にかかることになるとは思っていなかった。それゆえ本論に記した成り行きで2000年8月中旬にお会いした時は感慨にとらわれたものである（結果的には氏にお会いできるラスト・チャンスに間に合ったことになる）。「先達の方々がどうしたことかスラ所のスラを梢だと述べておられるが・・・。」と氏は淡々と語っておられた。謹んで冥福を祈りたい。

#### 【訂正とお詫び】

本誌23号に掲載した拙論「いちよか、考」に次の二点の不備がありました。

○嘉味田1982として引用した文献を参考文献欄に書き落としてしまいました。参考文献欄に以下の文献をつけ加えます。

嘉味田宗栄 1982 『琉球文学小見 ことばの本源を探る』 沖縄時事出版

故嘉味田宗栄氏には勿論のこと、当惑したであろう読者の方に対しても深くお詫び申し上げます。

○徳之島伊仙町阿三方言の話者として示した直谷久彦氏は、直谷尚彦氏の誤りです。直谷氏に対して深くお詫び申し上げます。